天使と悪魔のメスガキハーレム

※一部本編と異なる場合があります

	トラック０１
小春	「叔父さん初めまして～♪　あたしはこ～は～る♪　気軽に小春って呼んでね♪　お～じ～さん♪」
美冬	「えへへ♪　叔父様～♪　初めまして♪　私は美冬っていいます♪　私の事も気軽に美冬って呼んでくれると嬉しいです♪」
小春	「それで叔父さ～ん？　あたし達をラブホに呼んでくれたってことはさ、叔父さんもあれでしょ？」
小春	「若くてエッチな現役JKに虐められながら～♪　い～っぱい無様なしゃ・せ・い♪　したいんでしょ？」
美冬	「えへへ♪　やっぱりそうですよね♪　私達、パパ活界隈ではエッチが上手くて生意気なメスガキって噂になっちゃってますし、叔父様もその噂を聞きつけて呼んでくださったんですよね？」
小春	「あはは♪　ほんっと、叔父さん達ってJK好きだよね～♪」
小春	「あたし達よりお金も地位もあるのに、こ～んな若くて幼い女の子に虐められて無様な姿晒しちゃってさ♪」

小春　「はぁ～♪　ほんっと叔父さんって気持ち悪ぅ～♪　大人としてのプライドとかないのかな～♪　ねぇねぇ？　そこの所どうなの～？　教えて～？　お～じ～さ～ん～♪」

美冬　「小春ちゃんの言う通りです♪　私達、今まで色んな叔父様達とエッチしてきましたけど、み～んな情けない顔して媚びを売ってくるんですよ～？」

美冬　「大事なお金を沢山積んで、最後には土下座しながらセックスしたいってオネダリしてくるんです♪」

美冬　「今思い返してみても……はうぅ～♪　大の大人がプライドをかなぐり捨てる姿はとっても可愛かったですぅ～♪」

小春　「えぇ～？　あたしは別に叔父さんの土下座何て見てもキモイとしか思わないけどな～」

小春　「それに叔父さんって大人特有の匂いがしてすっごく苦手～」

小春　「今日だって～……すん、すんすん……うっわ～……やっぱりぃ♪」

小春　「すぅ～～～……うえぇ～～～～♪　何これ～♪　叔父さんくっさ～～～♪」

小春　「納豆とか汗とかそういった臭さとは別格ぅ♪
すぅぅ～～～～……はぁぁ～～～～～♪」

小春　「んひゃ～～♪　こんな臭い生き物が街中歩いてるとかテロでしょ～♪　生きてるだけで人様に迷惑をかける害悪ぅ♪　何で平気な顔して生きてられるのか理解できな～い♪」

美冬　「んもぅ、小春ちゃんったら言い過ぎだよ～？
いくら臭いからって歩く公害だなんて事ある訳……」

小春　「あっ！　美冬ダメ！　そんなに近づいて嗅いじゃ危ないから……！」

美冬　「ん～……すん、すんすん……すぅぅ～～～～……うぅ……！　けほっ！　けほ、けほっ！？
ぅ、あうぅぅ……やぁ、そんな……こんなに臭い叔父様初めて……うぅ……うえぇぇ～～……」

小春　「み、美冬？　大丈夫？　しっかりして？　ほら深呼吸……は、ヤバイ……叔父さんの匂いまた吸い込んじゃう……って、あ、あれ？」

美冬　「ぅ……ん、あうぅぅ……♪　えへへ～♪
はぁ、はぁ♪　あぁ～～……♪　んぅぅ～～♪
すぅぅ～～～～♪　はぁ～～～♪　はぁぁ～～～♪」

美冬
「あぁ～♪　こんな臭い叔父様の香りは初めてで～♪　んふぅ♪　はぁ、はぁ♪　あぁ♪　叔父様～♪　素敵ですぅ♪」

美冬
「うぅ♪　叔父様臭すぎます～♪　あぁ～♪　臭い♪　臭い♪　臭い♪　くっさ～～い♪　んふぅ♪　臭すぎますぅ♪　あぁ♪　叔父様くっさ～い♪　叔父様ぁ♪　んふぅ♪　叔父様叔父様ぁ♪」

美冬a
「あぁん♪　叔父様の体臭ぅ～♪　んん♪
はぁ、はぁ、はぁ、はぁ♪　ん～♪　はぁぁ～～～……♪　あぁ♪　叔父様ぁ♪　ん、はぁ♪
　はぁ♪　はぁ～～……♪　可愛いですぅ♪
とっても可愛いぃ♪　んぁぁ♪　はぁ、はぁ～♪」

美冬a
「はぁ♪　はぁ♪　ん♪　はうぅ～♪」

小春a
「うっわ～……こんな臭い叔父さんに発情しちゃうなんて、相変わらず美冬の性癖は尖ってるな～。まぁあたしもお金もらえるなら我慢するけど……って美冬？　いつまでも発情してないで戻ってきて～！」

美冬
「ん、あっ！　こ、小春ちゃん！　ご、ごめんね！？　私ったらまた自分の世界に入っちゃって……」

小春　「うぅん♪　全然大丈夫♪　ってか美冬の叔父さん好きは今に始まったことじゃないしね♪」

美冬　「ふぇぇ！？　やっ！　別に叔父様が特別好きって訳じゃないんだよ！？」

美冬　「ただ、何故か叔父様みたいな臭い体臭を嗅ぐと気持ちよくなっちゃうだけで……」

小春　「それってつまりは叔父さんの事が好きって事でしょ？　大丈夫大丈夫♪　美冬の事は全部分かってるから♪」

美冬　「むぅ～……！　小春ちゃんってば絶対何もわかってないよ～……」

小春　「えぇ～？　そうかな～？　う～ん、あ！　でもこれだけは知ってるよ？」

美冬　「ふぇ？　これだけって……な、何かな……？」

小春　「ふふ♪　それはね～……美冬は叔父さんよりあたしの事が大好きだってこ～と♪」

美冬　「ひゃふっ！？　やっ！　ちょっと小春ちゃん……！　叔父様の前でそんな事言っちゃ駄目！恥ずかしいよ～……！」

小春　「ふふ♪　だ～め！　偶に調子に乗った叔父さんが告ってくるから、今の内に美冬はあたしの物だって分からせとかないと♪」

小春　「って事で叔父さん？　美冬とエッチしたからって勘違いしちゃダメだからね？」

小春　「今日あたし達とエッチするのはあくまでパパ活、お仕事だから。絶対あたし達の事好きになっちゃ駄目だよ？」

小春　「ふふ♪　美冬はあたしの物だって事、叔父さんに見せつけてあげる♪」

美冬　「はぇ？　ちょっと、やっ！　こ、小春ちゃ……んぷっ！？」

小春　「ぷはぁ♪　はぁ、はぁ♪　あはは♪　美冬～♪　ん～ちゅ♪　れろ♪　ちゅぷ♪　ん……ちゅ♪」

小春　「うん♪　やっぱりあんな臭くてキモイ叔父さんより美冬とシた方が断然気持ちいいね♪」

小春　「叔父さんは所詮ただの金づる。メスガキに虐められるのが好きなおっさんとかキモイだけだしね～♪」

美冬　「あうぅ……小春ちゃんってば、叔父様の前でそんな事言っちゃダメだよぅ……それに告白みたいな真似まで……」

美冬　「でも……えへへ♪　私も同じかな……♪　叔父様の無様なおちんぽぴゅっぴゅっぴゅ見るのも好きだけど、やっぱり一番好きなのは……愛してるのは小春ちゃんだけだから……♪」

小春　「ん……美冬……♪」

美冬　「小春ちゃん……♪」

小春　「ふふ♪　ねぇ美冬？　さっきから叔父さん、ずぅ～っとこっち見ながらちんぽシコってるんだけどめっちゃキモくなぁい？」

美冬　「うん……ズボン越しにおちんぽ揉んでて……あ、金玉も揉み始めたね……うわ……激しい♪　あんなに興奮した顔して……はうぅ♪　叔父様の感じてる顔、とっても気持ち悪いです～♪」

小春　「うっわ～♪　鼻息も荒くしてほんっとキモすぎ～♪　ってか鼻息まで臭いんだけど～♪　うぇぇぇ♪　くっさ～～♪　くっさ～～～～♪」

小春　「はぁ～……ね～叔父さ～ん？　後で相手してあげるからちょっとそっち行っててくれない？」

小春　「今美冬といい感じにレズってるのに、叔父さんのキモい豚声聞くと萎えるからさ～」

美冬　「あ、あのぅ……私は別に大丈夫ですよ？　叔父様には沢山お金をいただく予定ですし、私は叔父様の臭い匂い、嫌いじゃないですから♪」

美冬　「それに……えへへ♪　叔父様の勃起したおちんぽを見てると……あぁ♪　お腹の奥が熱くなって♪　うぅ♪　パンツに染みが出来ちゃいますぅ♪」

美冬b　「はぁ♪　はぁ♪　はぁ♪　はぁ～♪　ん、ごく♪　はぁ♪　はぁ～……♪　ん、はぁ♪　はぁ♪　はぁ～……♪」

小春b　「美冬ったら相変わらずやっさし～♪　なら叔父さんはそこで大人しくあたしと美冬のキス見ながら一人寂しくシコっててね～♪」

小春　「ほら美冬？　キスの続きしよ？」

美冬　「ぁ……小春ちゃん……♪」

美冬　「んん♪　小春ちゃん♪　もっとキスして～？」

小春　「もぅ♪　仕方ないな～♪　こんなに美冬とキスしてたら、エッチする前にあたしのおまんこぐちゅぐちゅになっちゃうよ～」

美冬　「あうぅ……でも小春ちゃんが悪いんだよ？　いきなりキスしてきて……うぅ……私、もぅ止まれないよ～……」

美冬c　「小春ちゃん♪　ん……はぷ♪」

小春c　「美冬……♪　ん……はぷ♪」

小春　「あぁ♪　美冬……好きぃ♪　大好きぃ♪」

美冬　「んん♪　私も好き♪　叔父様とのキスよりもやっぱり小春ちゃんとのキスが一番好きだよぉ♪」

小春d　「ん、んん～……ぷはぁ♪　はぁ、はぁ、はぁ～～……♪」

美冬d　「ん、んん～……ぷはぁ♪　はぁ、はぁ、はぁ～～……♪」

小春　「ん♪　美冬……♪」

美冬　「小春ちゃ～ん♪」

小春　「美冬、だ～い好き♪　臭くて不潔な叔父さんより断然好き～♪」

小春　「天使みたいに真っ白で綺麗な肌に、可愛い声♪　やっぱりあたしの一番は美冬だよ～♪」

美冬　「小春ちゃん……嬉しい♪　私も好きだよ♪　小悪魔みたいに可愛い笑い声が本当に可愛くて……えへへ♪　好き♪　スキスキ♪　だ～い好きぃ♪」

小春　「あぁ……♪　美冬ぅ……♪」

美冬　「小春ちゃん……♪」

小春　「ん、って、あはは♪　これ以上は本当に収拾つかなくなっちゃうからここまでにしよっか♪」

小春　「さっきから叔父さんも放置しっぱなしだし……って……うっわ～……マジぃ？　涎ダラダラ垂らしながらガン見とかキッモ～～♪」

小春　「おちんぽのとこちょっと濡れてるしさ～……もしかして叔父さん、女の子同士のキス見て射精してない？」

美冬　「えぇ～……叔父様……本当なんですか？　ふぇぇ……こんなに早く射精しちゃうなんてあまりにも情けなさすぎますぅ～♪」

小春　「うっわ♪　叔父さんきんっも～♪　今までエッチしてきた叔父さんの中で一番キモいまである～♪」

小春　「はぁ～♪　叔父さんきんっもぉ～♪　キモ♪　キモ♪　キモ♪　キモ♪　きんっも～～♪」

美冬　「私達まだ叔父様に何もしてないんですよ？　本当なら手コキしてあげたりお口でペロペロしてあげたり、いっぱいご奉仕してからぴゅっぴゅしてもらうつもりだったんですけど……」

美冬　「ふふ♪　あぁ♪　叔父様ってば、今までの叔父様の中で一番気持ち悪くて♪　情けなくって♪　早漏で♪　とっても可愛そうな叔父様ぁ♪　素直にキモイです～♪」

小春α　「あ～あ～♪　叔父さんの～……ド変態♪」

美冬α　「えへへ♪　叔父様のぉ……変態さん♪」

小春　「レズキス見ただけで射精しちゃう雑魚雑魚おちんぽ♪」

美冬　「おちんぽすぐぴゅっぴゅしちゃう早漏さん♪　おまんこの味を知らない童貞さん♪」

小春　「んん？　な～に～？　あたし達に煽られてま～たおちんぽ勃起しちゃったんだ～♪」

美冬　「ふふ♪　叔父様ってば、そんなに私達と～♪　生意気なメスガキおまんことセックスしたいんですか～？」

小春　「ふ～ん♪　そっかそっかぁ♪　でも叔父さん分かってる～？　メッセでも伝えたと思うけど、叔父さんは1回射精する度に4万円払わなくちゃダメなんだよ～？」

美冬　「叔父様が情けなくぴゅっぴゅする度に、お財布から諭吉さんが4人消えちゃうんです♪」

小春　「だから～♪　もし叔父さんの財布の中身が0円になったら、そこでおしまい♪」

美冬　「叔父様がどれだけオネダリしても、情けなく土下座しても♪　それ以上はぴゅっぴゅさせてあげません♪」

小春　「まさかいい歳した叔父さんが生エッチする前にお財布空っぽにしないよね～？　もしそんな事になったら、いくらなんでも雑魚すぎて可哀そすぎるもん♪」

美冬　「えへへ♪　叔父様？　頑張って頑張って、最後までおちんぽ我慢して、お金を節約しながらメスガキおまんこにたどり着いてくださいね？」

美冬　「叔父様が私達のおまんこにおちんぽ入れて射精しちゃう情けない姿、間近で見たいんですから♪」

小春e　「だからさ♪　お～じ～さ～ん♪」

美冬e　「ですから♪　お～じ～さ～ま♪」

小春d　「期待してないけど、頑張ってよね♪」

美冬d　「期待してますから、頑張ってください♪」

トラック０２

小春　「は～い♪　叔父さんおっまたせ～♪」

美冬　「えへへ♪　叔父様♪　お待たせしてしました♪」

小春　「ねね♪　どうどう？　叔父さんが見たがってた現役JKの下着姿だよ～？」

美冬　「今日は叔父様にいっぱい喜んで欲しかったので、一番気に入ってる下着で揃えて来たんです♪」

小春　「あたしが小悪魔カラーの黒下着で～♪」

美冬　「私が天使カラーのピンク下着です♪」

小春　「透け透けレースに～、ブラの中心にはアクセもあしらわれててオシャレでしょ～♪」

美冬　「所謂勝負下着って言うんですけど……どうですか？　喜んでくれましたか？」

小春　「って、うっわ～♪　叔父さん鼻の穴開きすぎぃ♪」

小春　「ふごふご～って豚みたいな泣き声あげちゃって♪」

小春　「あは♪　何これ♪　ガチでキモイ奴じゃん♪
は～♪　きっも～♪　こんなキモ豚とセックス
とかほんと最悪～♪」

美冬　「やん♪　叔父様の鼻息が当たってくすぐったい
ですぅ♪　やっ♪　あん♪　お、叔父様ぁ……
♪」

美冬　「ぅぅ……ひゃうぅ！？　んもぅ♪　叔父様～？
　めっ！　ですよ～？」

美冬　「はい♪　私達の下着姿に興奮してくれてるのは
分かりましたから、一旦落ち着いてください。
ほら叔父様～？　両膝ついてステイですよ
～？」

美冬　「は～い♪　よくできました～♪　叔父様にも最
低限犬並みの知能があって良かったです～♪
ヨ～シヨシヨシ～♪」

小春　「あは♪　叔父さんってばJKに飼いならされて情
けな～い♪」

美冬　「えへへ～♪　叔父様～？　言う事を聴けたワン
ちゃんにはご褒美を上げますから、どうか私の
方に顔を寄せてください♪」

美冬　「はい♪　そうです♪　ん、それでは……素直な
ワンちゃんに～……ん……ちゅ♪」

小春　「わぁ♪　美冬ってばこんなキモい叔父さんとキスとか大た～ん♪」

美冬　「ん、ちゅ、ぷはぁ♪　えへへ～♪　小春ちゃん見て～？」

美冬　「叔父様ったら、まるで初めてキスしたみたいに顔真っ赤にして……ん～ちゅ♪　ちゅ、ちゅ♪」

美冬　「あぁん♪　そんな舌伸ばしてキスせがんじゃ駄目ですよ～♪　んもぅ……ん～……ちゅ♪」

美冬　「あぁ♪　叔父様ぁ♪　可愛いですぅ♪　ん～ちゅ♪　ちゅ、ちゅ♪」

美冬　「はい♪　いいんですよぉ？　今夜はいっぱい私に甘えてください♪」

美冬　「人としてではなく、従順な一匹のワンちゃんとして♪　性欲しか能のない一匹のお馬鹿さんとして♪　いっぱい私の唇に甘えてくれていいですからね～♪」

小春　「う～わっ……あたしの美冬とこんなキモイおっさんがキスしてるのちょっとヤだな～」

小春　「でも、キスしただけでおちんぽぴゅっぴゅしてくれるなら楽だし、お金貰えるなら文句はないし……」

小春
「ならあたしも、叔父さんの精液とお金を搾り取る為に～♪　叔父さんの～……お～み～み♪　虐めてあげよ～っと♪」

小春
「ほ～ら♪　叔父さ～ん♪　ん～ちゅ♪　ちゅ、ちゅ♪　ん～……ちゅぷ♪」

小春
「あは♪　軽く耳にキスしただけで驚きすぎ♪　叔父さんって絶対女の子と付き合った事ないでしょ～♪」

小春
「ふふ♪　なんだか叔父さんを虐めるの面白くなってきちゃった♪」

小春
「じゃあこんなのはどう？　すぅ～～～……はぁぁぁ～～～～～～♪　はぁぁ～～♪　はぁぁ～～♪　はぁぁ～～～～～～～～～♪」

小春
「叔父さんの臭い息と違って～♪　現役JKの甘～いと・い・き♪　い～っぱいお耳で感じてね～♪」

小春
「すぅ～～～……♪　はぁぁ～～～～～～♪　はぁぁ～～～♪　はぁぁ～～～～～♪　すぅぅ～～……はぁぁぁ～～～～～～～～～……♪」

小春
「あはは♪　おちんぽまたビクってさせちゃったね～♪　ズボンの中に隠れてても丸分かり～♪」

小春　「次は～……口の中に唾液をため込んで～……」

小春　「ん、んん～……くちゅ、くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ……♪」

小春　「ふふ♪　叔父さ～ん？　この唾液の香りぃ……お耳で感じておちんぽイっひゃえ～♪」

小春　「ん、はぁぁぁ～～～～～～♪　はぁぁ～～～～♪　はぁぁ～～～♪　すぅぅ～～……はぁぁぁ～～～～～～～♪」

小春　「あはは♪　叔父さんってば鳥肌立ってる～♪　お耳敏感すぎでしょ～♪　すぅ～～……ふぅ～～～～♪　ふぅ～～～～♪　ふぅ～～～～～～～♪」

小春　「このままずぅ～～～っと耳元であたしの事感じさせてあげる♪」

美冬　「やん♪　叔父様ぁ……小春ちゃんの吐息が気持ちいいのは分かりますけど、私とももっとキスしてください♪」

美冬　「ん～……ちゅ♪　れろ♪　れろれろ♪　ん～♪　ほ～ら叔父様～？　私もお口に涎をため込んで～……」

美冬　「ん～……くちゅ♪　くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ♪　ふふ♪」

美冬　「さぁ♪　私の唾液、口移ししてあげましゅから、いっふぁい飲んでくらひゃい♪　んむ♪　ん～……ちゅぷぅ♪」

美冬　「んちゅ♪　じゅるる♪　じゅるるるるるぅぅ～～～～～♪　じゅるる♪　ちゅぷぷっ♪　んちゅ♪　じゅるる♪　じゅるるるぅぅ～～～～♪」

美冬　「んふぅ～♪　じゅる♪　じゅるるぅ～……じゅぷぷ♪　んちゅ……じゅる♪　じゅるるぅ……♪　ん、んむぅ……ぷはぁ♪　はぁ、はぁ、はふぅ～……♪」

美冬　「叔父様、私の唾液はいかがでしたか？」

美冬　「臭かったですか？　それとも甘かったですか？」

美冬　「な～んて、返事を聞かなくても分かります♪　叔父様ったらさっきからお口を開けてお替りを待ってるんですもん♪」

美冬　「いいですよ～？　もっとお口を開けて無様にオネダリしてください♪」

美冬　「そしたら、オネダリ上手な叔父様に免じてい～っぱい唾液ジュースお替りあげますから♪」

美冬　「という事で～……は～い叔父様～？　お口をあ～～んって開けて～……ん～……れ～～～～♪　んちゅ♪　じゅる♪　じゅるるるぅぅ～～～～♪」

美冬　「ん、じゅる♪　じゅるるるぅぅ～……ん～……ぷはぁ♪　ん♪　れ～……♪　ちゅぷ♪　ん、んん～♪」

美冬　「叔父様～♪　私の口の中見てください♪　ん、れ～～～～……♪」

美冬　「私と叔父様の口が唾液で繋がって♪　あぁ♪　まだおちんぽ入れてもらってないのに叔父様と一つになった気分です♪」

美冬　「んふふ♪　ん～♪　くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ♪」

美冬　「ん、ごく♪　ごく♪　ごく……あぁ～♪　叔父様の唾液、とっても臭くって♪　あぁ♪　美味しいです～♪」

美冬　「叔父様ぁ♪　もっと唾液だら～って垂らしながら叔父様のおロジュース飲ませてくださいぃ♪　ん、はぷ♪」

小春　「ん、はぁ、はぁ～♪　美冬ってばよくそんな美味しそうに叔父さんの唾液飲めるよね～」

小春　「なんか美冬がごくごくしてるの見ると、こんなキモイ叔父さんの唾液でも美味しそうに見えてきて……うぅ……何かあたしまで叔父さんとキスしてみたくなっちゃった……」

小春　「ねぇ美冬～……あたしも叔父さんとキスしたいから交代して欲しいんだけど駄目～？」

美冬　「ん、じゅる♪　じゅるるぅぅ……ん、んむぅ……ぷはぁ♪　はぁ、はぁ……♪　ん、ちゅ♪　えへへ♪　うん♪　小春ちゃんの頼みならいいよ～♪」

美冬　「私も叔父様のお耳にちゅっちゅしてみたかったから♪　それでは叔父様～♪　次は小春ちゃんとのキス楽しんでくださいね♪」

小春　「あは♪　叔父さ～ん♪　すん、すんすん……うぇぇ……やっば～♪　叔父さんってば体臭も酷いけど口臭も臭すぎぃ～♪」

小春　「美冬ってばよくこんな臭い叔父さんとねっとりキス出来たね～　吐きそうになってない？　本当に大丈夫？」

美冬　「うん♪　大丈夫だよ♪　確かに最初は臭すぎて吐いちゃうかなって思ったけど、慣れちゃえば意外と美味しかったし……」

美冬　「それにね？　叔父様ってばキスする度に目がトロンってしてね？　こう、ちゅ♪　ちゅ♪　ってするとおちんぽも、ピク♪　ピク♪　って反応してくれてね？」

美冬　「あぁ～♪　今叔父様の全てを美冬が支配してるんだ～って実感出来て……あうぅぅ～～♪　すっごく気持ちよくて最高の気分になっちゃって～♪」

美冬　「叔父様ともっとキスしたいな～って、情けない叔父様をもっと見たいな～って思っちゃったの～♪　えへ♪　えへへへへ～♪」

小春　「へ～♪　美冬にそこまで気に入られるなんて叔父さんヤルね～♪　意外と天然ジゴロの才能があるのかも♪」

小春　「この臭さもある意味特殊なフェロモンだったりして……ふふ♪　まぁそれはキスしてみたら分かるか♪」

小春　「じゃあ叔父さ～ん♪　今度は小春ともキス♪　そ・れ・も～♪　初めから舌をぐちゅぐちゅ絡ませた唾液塗れのディープキス♪　し～て～あ～げ～る♪」

小春「あ～……んむぅ♪　んちゅ♪　じゅぷ♪　じゅるる♪　ん、れ～～……♪　んじゅうぅぅ……♪　じゅぶぶぶっ！　んちゅ♪　じゅる♪　じゅるる♪　じゅるるるるぅぅ～～♪」

美冬「小春ちゃんったらノリノリで叔父様とキスして……あうぅ……♪　まるで叔父様を食べちゃってるみたいで凄いですぅ♪」

美冬「私も～……叔父様には沢山ぴゅっぴゅしてもらいたいので～……こ～ち～ら♪　叔父様のお耳♪　失礼しますね～♪」

美冬「はぁ～♪　叔父様のお耳……ん、すん♪　すんすん……すぅぅ～～～～……うえぇぇ～～～～♪」

美冬「叔父様のお耳♪　沢山耳カスが詰まってるせいか、んん♪　とっても香ばしくって……臭くって♪」

美冬「はぁ、はぁ、あぁ～♪　ん～……ちゅ♪　ちゅ、ちゅ♪　ちゅ♪　ちゅ♪」

美冬「えへへ♪　叔父様のお耳にキスしちゃいました～♪　んん♪　ちょこっと叔父様の耳垢が唇にくっついて……」

美冬

「あむ♪　ん、んん～……くちゅ♪　くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ♪　ん～……ん、あぷ♪　ちゅぷ♪　くちゅ♪　くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ♪」

美冬

「んふふ♪　叔父様の耳垢と～……私の唾液が混じった～……んぷっ……臭くてあま～いと・い・き♪　耳に吹きかけてあげましゅね～♪」

美冬

「ん……くちゅくちゅ……すぅ～……はぁぁぁぁ～～～～～～～～♪　はぁぁぁ～～～～♪　はぁぁぁ～～～♪　はぁぁぁぁ～～～～～～～～～♪♪」

美冬

「んふぅ♪　ん♪　ごく♪　ごく♪　ごく♪　ごく♪　んぷっ……ん、んん～……ぷはぁ♪　はぁ、はぁ、はぁ、はふぅ～～♪」

美冬

「えへへ♪　叔父様～♪　ん～ちゅ♪　ちゅ、ちゅ♪　ふふ♪　小春ちゃんにお口を犯されながらのお耳責め♪　楽しんでくれましたか～？」

美冬

「な～んて♪　キスしながらじゃ応えられませんよね♪　でしたら私の好きにさせてもらいます♪　はい♪　生意気に天のあま～い吐息攻め♪　楽しんでください♪」

小春
「んちゅ♪　じゅる♪　じゅるるるぅぅ～～♪
ん、んむぅ……♪　じゅる♪　じゅるるるる
るぅ～……ぷはぁ♪　はぁ、はぁ……はふぅ～
～～～♪」

小春
「んむ……ん、ごく♪　ごく♪　はぁ～～～～～…
…♪　うえぇぇ～～～～～～♪　叔父さんの唾
液くっさ～～～～♪」

小春
「ねぇ叔父さん？　今まで生きてきて自分の口が
臭いって思った事ないの？」

小春
「あは♪　やっぱり自覚なかったんだね～♪　な
ら丁度いい機会だし～……あたしが叔父さんの
口がいかに臭いか教えてあげる♪」

小春
「ほら叔父さん♪　こっち向いて～？　そそ♪
そのまま～……」

小春
「すぅぅ～～～～……♪　はぁぁぁぁ～～～～～
～～～♪　はぁぁぁ～～～～♪　はぁぁぁ～～～
～♪　すぅ～……はぁぁぁぁぁぁぁ～～～～～
～～～～～～～～～～♪♪」

小春
「あは♪　どう？　これが叔父さんの口臭だよ？
　めっちゃ臭いでしょ～♪」

小春
「ん～？　ふふ♪　もう一回？　うん♪　いいよ
～♪」

小春　「すぅぅ～～～～～……♪　はぁぁぁ～～～～～♪
　はぁぁ～～～～♪　はぁぁ～～～～～♪　すぅぅ～～～～……はぁぁぁぁぁ～～～～～～～～～～～♪♪」

小春　「このまま～……あ～……んむぅ♪　じゅるるるぅぅ～～～♪」

美冬　「はぁ、あうぅ……♪　小春ちゃんったら大胆……って、ひゃわっ！　今叔父様のベロに吸い付いて……あうぅ……エッチすぎるよぉ……」

美冬　「こんなの見せられたら私……うぅ……お股切なくってぇ……叔父様の唾液お替りしたくなってきちゃうよ～……♪」

美冬　「ねぇ小春ちゃん？　また私にも叔父様の唾液分けて欲しいの……駄目かな？」

小春　「ん？　んちゅ♪　じゅる、じゅるるるぅぅ～～～……ん、ぷはぁ♪　はぁ、はぁ……えへへ♪
　美冬ってばもう我慢できなくなっちゃったんだ～♪」

小春　「うん♪　いいよ～♪　大好きな美冬の頼みだもん♪　ほら叔父さ～ん♪　美冬がまた叔父さんとキスしたいって～♪」

小春　「あたしの大好きな美冬とキス出来るとかマジで特別なんだから、感謝してよね～？」

美冬　「えへへ♪　叔父様♪　どうかこちらを向いてください♪　はい♪　このまま……ん、ちゅ♪」

美冬　「ん……叔父様の唾液、やっぱりとっても臭くて美味しいです♪」

小春　「ほら叔父さ～ん♪　今度はあたしと～……♪」

美冬　「叔父様～♪　私とも～♪」

美冬　「ん～♪　叔父ひゃま～♪　んちゅ♪　じゅる♪　じゅるるるるるぅぅ～～～～♪」

美冬　「ん、ぷはぁ♪　はぁ、はぁ♪　えへへ～♪　叔父様の唾液ぃ♪　ん♪　ごく♪　ごく♪　あうぅぅ♪　あぁ♪　くっさ～～～～い♪」

小春　「あは♪　叔父さんってば美冬に臭いって言われて興奮してるね～♪　おちんぽも勃起してて……って、ん～？　な～に～？　もしかしてキスだけでイっちゃいそうなの～？」

美冬　「やぁん♪　叔父様ってば、もうぴゅっぴゅしちゃうんですか？　あうぅ……♪　本当に堪え性の無い雑魚雑魚おちんぽです～♪」

小春　「ならさ～♪　最後はあたしと美冬、2人同時に叔父さんとキスしてイかせてあげる♪」

美冬　「えへへ♪　叔父様のお口はおっきいですから、きっと3人でキス出来ると思いますので♪」

美冬　「はい♪　叔父様ぁ～♪　思いっきりベロをれ～って出してください♪」

小春　「あたしと美冬でいっぱいれろれろしてあげる♪　ほ～ら♪　いっくよ～？」

美冬┐　「ん、れ～～～～……ちゅ♪　じゅる♪　じゅるるぅぅ～～～～♪」

小春┐　「ん、れ～～～～……ちゅ♪　じゅる♪　じゅるるぅぅ～～～～♪」

小春　「んちゅ♪　ふふ♪　ほ～ら～♪　叔父さ～ん♪　┐の唾液飲みながらイっちゃえイっちゃえ～♪」

美冬　「ん～ちゅ♪　叔父様ぁ♪　どうか私達の唾液を楽しみながら～♪　情けないお射精ぴゅっぴゅしてくらひゃい♪」

小春　「ほ～ら～♪　叔父さん♪　イっちゃえ♪　おちんぽイっちゃえ♪　おちんぽイっちゃえ～♪」

美冬　「はぁ～♪　おちんぽぉ♪　ん～♪　おちんぽイっへ～？　ちゅ♪　ん～ちゅ♪　叔父様ぁ♪　おちんぽイっへくらひゃい～♪」

小春「んふぅ♪　ほらぁ♪　そろそろ～……じゅるるる♪　じゅるるるぅぅ～～♪　んちゅ♪　最後にぃ……♪」

美冬「私と小春ちゃんの唾液を～♪　じゅる♪　じゅるるるぅぅ～～～♪　思いっきり飲ませてあげて～♪　んちゅ♪　じゅる♪　じゅるるる～～♪　思いっ切りおちんぽイっへくらひゃい♪」

小春「ん、れ～～～～……♪　んちゅ♪　じゅる♪　じゅるる♪　じゅるるる♪　じゅりゅりゅりゅりゅりゅりゅりゅ～～～～～～～～～～～～～～♪♪」

美冬「ん、れ～～～～……♪　んちゅ♪　じゅる♪　じゅるる♪　じゅるるる♪　じゅりゅりゅりゅりゅりゅりゅりゅ～～～～～～～～～～～～～～♪♪」

小春「ん！？　きゃっ！？　ひゃん！？」

美冬「ん！？　きゃっ！？　ひゃん！？」

小春「やっ！　え！？　ちょ叔父さんってば泡吹きながらおちんぽびゅびゅ～って射精しちゃって♪　あは♪　やばっ♪　ズボンからザーメン飛び出て気持ち悪ぅ～♪」

小春　「それに精液の匂いまで香ってきて……うえぇぇ♪　はぁぁ～♪　臭すぎぃ♪　あは♪　ほんと救いようのない雑魚おちんぽだ～♪」

小春　「ま、とりあえず射精しちゃった訳だし、追加で4万円貰っちゃうね～♪　えぇ～っと叔父さんの財布は～……あったあった♪」

小春　「はい4万いただき～♪　あは♪　おちんぽ触んないでこんなに貰えるなんて最高だね～♪」

美冬　「ふふ♪　もっともっと射精させてあげたいんですけど、叔父様は放心しちゃってしばらく動けそうもありませんし……ねぇ小春ちゃん？　こっち向いて欲しいな？」

小春　「ふぇ？　美冬？　って、ぁ……んぷっ……！」

美冬　「ふふ♪　小春ちゃんの唾液と叔父様の唾液が混ざったおロジュース♪　口移しで飲ませて貰っちゃった♪」

小春　「はぁ、はぁ……んもぅ……♪　美冬ってばイタズラ好きなんだから～♪」

美冬　「だって、叔父様とキスする小春ちゃん可愛かったんだもん♪　そんな小春ちゃんを見てたら私、我慢できなくって♪」

小春　「うん♪　あたしももっと美冬とキスしたい♪
意識が飛んじゃった叔父さんが帰ってくるまで、いっぱいれろれろ口移ししよ？」

美冬　「うん♪　小春ちゃん♪　好きぃ……♪」

小春　「美冬……♪　ん……♪」

トラック０３

小春　「叔父さんってばすぐまた勃起しちゃって……ん～！　ズボンがひっかかって上手く脱がせられな～い！」

美冬　「あぁ♪　叔父様ってば凄い性欲です♪　ん……♪　小春ちゃんと2人がかりで脱がせられないなんて……ん～……えい！　えい、えい！」

小春　「はぁ、はぁ……ん～……もういい加減ムカツイて来たし……ねぇ美冬？　一緒にえいって脱がせちゃわない？」

美冬　「うん♪　いいよ♪　小春ちゃんと一緒に～……」

小春　「はい♪　せ～……の！」

小春＜　「え～～い♪」

美冬＜　「え～～い♪」

小春ー　「うっわ～～～～～♪」

美冬ー　「やぁ～～～～～ん♪」

小春　「やっば～♪　パンツの中で精液が蒸れて……すっご～い♪　ほかほか精液だね～♪」

美冬　「はわぁ～♪　あぁ♪　これが叔父様の精液の香り～♪　ん～♪　すぅ～～～～～……♪　はぁぁ～～～～～♪」

美冬　「あぅあぅ～～♪　叔父様の精液♪　叔父様のザーメン♪　んん♪　おちんぽとっても臭いですぅ～♪」

小春　「はぁ～♪　叔父さんの香り～……♪　ん♪　あたしも～……すぅぅ～～～～～～～……はぁぁ～～♪　うえぇぇ～～～～♪」

小春　「おちんぽって皆臭いから覚悟してたけど、これはいくら何でも酷すぎ～♪」

小春　「こんなの入れられたらおまんこ腐っちゃうよ～♪　うえぇ～～♪　くっさ～い♪　叔父さんの精液くっさ～～い♪」

美冬　「あぁ～♪　ねぇねぇ♪　小春ちゃん見て～♪　精液でドロドロで気づかなかったけど、叔父様のおちんぽ、先っぽまで全部チン皮で隠れちゃってるよ～♪」

小春　「うっわ♪　えぇ♪　ほんとだ～♪　うっわ～♪　うわうわうわうわ～♪　あはは♪　叔父さんって包茎だったんだね～♪」

小春　「しかもこれ、全部隠れちゃってるってことはあれでしょ？　真性包茎って奴でしょ？　おちんぽの中でも一番情けなくて恥ずかしい奴でしょ～？」

小春　「ぷっ♪　あははは♪　はぁ～だっさ～♪　こんな恥ずかしくて気持ち悪いおちんぽ初めて見た～♪　ぷぷぷ～♪」

美冬　「あうぅ～……でもこれ……おちんぽ全部皮に隠れちゃってるけど、ちょっと頑張れば剥けそうかも？」

美冬　「なら真性包茎じゃなくって仮性包茎って事になるのかな？　あうぅ……こんなおちんぽ初めてだからよく分からないよ～……」

小春　「まぁどっちにしろ包茎って事には変わりないんだし気にしないでいいんじゃない？」

小春　「そんな事より～♪　ふふ♪　こんな敏感で恥ずかしいおちんぽならすぐイっちゃうだろうし♪　美冬？　一緒に叔父さんのおちんぽ虐めちゃお？」

美冬　「そうだね♪　私も叔父様のおちんぽいっぱい味わいたいもん♪」

美冬　「すぅ～……はぁぁ～～♪　はうぅ～♪　今からおちんぽ舐めるの楽しみです～♪」

小春　「あは♪　ならまずは～……敏感で恥ずかしがり屋な情けな～いおちんぽに～……あたし達のぷるっぷるの唇で～……キス♪　してあ～げ～る♪」

美冬　「はぁ、はぁ♪　あぁ～♪　叔父様～♪　私達のおちんぽキス♪　楽しんでくださいね♪」

小春Ⅲ　「ん～……ちゅ♪」

美冬Ⅲ　「ん～……ちゅ♪」

美冬　「あぁ♪　これが叔父様のおちんぽの味なんですね～♪　ふふ♪　ん～ちゅ♪　ちゅ♪　ちゅ♪　あまりに臭すぎて唇が痺れちゃいます～♪」

小春　「軽く舐めただけでこの臭さ♪　んむ♪　ちゅぷ♪　ちゅ、ちゅ♪　はぁ～♪　気持ち悪～い♪」

小春　「精液もぉ……うぇっぷ♪　あは♪　なにこれ♪　舌にねば～って張り付いてきて面白～い♪」

美冬　「えぅ♪　れろ♪　れろれろ♪　ん～ちゅ♪　ちゅ、ちゅ♪　やぁん♪　私の舌にも叔父様の精液がべったり張り付いてきて～♪」

美冬　「んむ♪　ん～♪　くちゅくちゅくちゅくちゅ♪　はうはうぅ♪　今まで何リットルもの精液を飲んできましたけど、叔父様の精液が断トツで臭いです～♪」

小春　「はぁ～♪　これ駄目～♪　いくらおちんぽにキスしても全然綺麗にならな～い♪」

小春　「やっぱ包茎って最悪だね～♪　いちいち皮を剥かなきゃお掃除も出来ないし、ずぅ～っとチン皮の中で蒸らされて汚いし♪」

美冬　「小春ちゃん、それは仕方ないよ。だって叔父様ってば、こんな歳になるまで一度も本番セックスした事ないんだよ？」

美冬　「普段オナニーで満足してる叔父様には包茎ちんぽで十分だったみたいだし、きっと包茎でも女の子を喜ばられるって勘違いしてるんじゃないかな？」

小春　「う～わ♪　何それ～♪　ぷぷ～♪　こんな包茎ちんぽで女の子が感じるわけないじゃ～ん♪」

小春　「えぇ～？　叔父さんって現実の女の子もエロ漫画みたいにすぐイっちゃうとでも思ってるのかな～？」

小春　「そんな訳ないのにね～♪　こ～んな段差もないただの皮被りちんぽで感じる女の子なんていないんだよ～？　現実とフィクションを混同しちゃうなんて可哀そうな叔父さ～ん♪」

美冬　「えへ♪　ぜ～んぶ皮に隠れちゃってる包茎おちんぽも可愛くはあるんですけどね♪」

美冬　「ただこんなおちんぽとお金無しでセックスしたいかって言われると……え、えぇっと……えへへ♪　ごめんなさい♪　流石にちょっと遠慮したいです♪」

小春　「だよねだよね～♪　皮の中にうじゃうじゃチンカス溜まってて汚いし、こんな雑魚ちんぽとセックスなんてお金もらえなきゃ絶対お断り～♪」

美冬　「でも、今日は……ん～ちゅ♪　叔父様からいっぱいお金を頂かなくちゃいけないので……ん～ちゅ♪　叔父様の臭いチンカスおちんぽ♪　私達のお口で可愛がってあげます♪」

美冬　「あうぅ……叔父様のチンカス、綺麗に張り付いてて中々……ん、ちゅ♪　剥がれてくれません……」

小春　「う～ん、そうだね～　チン皮の中で白いの溜まってるし、ベロを皮の中にねじ込まないと舐めとれないかな～」

美冬　「なら小春ちゃん♪　私はこっちからベロをれ～って入れるから……」

小春　「あたしはこっちね？」

美冬　「うん♪　じゃあ一緒に～……」

小春｝　「れ～～～～……ろれろれろれろれろれろれろ～♪」

美冬｝　「れ～～～～……ろれろれろれろれろれろれろ～♪」

小春　「うえぇぇぇ～～……叔父さんのチンカスにっが～～い！　それに大きなダマになってて……はぁ～……叔父さんってばチンカス掃除サボりすぎ～♪」

美冬　「ん、でもそれも仕方ないかも。ここまで酷い包茎ちんぽは初めてだから分からないけど、これ、普通にお風呂に入ってもおちんぽの中は洗い流せないんじゃないかな？」

美冬　「無理矢理皮を捲る事も出来そうだけどそうするとおちんぽ痛そうだし、剥きたておちんぽにシャワー掛けたりしたら……あうぅ……想像するだけで辛そうだよぉ……」

小春　「あは♪　やっぱ包茎って100害あって1利無しだね～♪　ん～ちゅ♪」

小春　「こうやって～♪　SEにおちんぽ掃除して貰えなきゃダメとか生きてて恥ずかしくないのかな～？」

美冬　「年下の女の子におちんぽ掃除してもらう叔父様……はうぅ♪　それはそれで可愛いから私は好きです～♪」

小春　「はぁ、はぁ……んん……包茎って舐め辛いから顎疲れてきた～……」

美冬　「あうぅ……私もベロがチンカス臭くなってきて……ん、はうぅ……」

小春　「ならそろそろ本気で舐めて～……♪」

美冬　「叔父様のおちんぽ♪　お口で犯して新鮮な精液ぴゅっぴゅさせてフェラを終わらせてあげますね♪」

小春β　「は～～む♪」

美冬β　「は～～む♪」

小春　「ん、じゅる♪　じゅるるるぅ～♪　ん、んん♪　叔父さんのちんぽ……んむぅ……段々膨らんできて……！　ん、んぶぅ……！？」

美冬

「えぷっ！　ぅっ！　じゅる♪　じゅるるるぅ♪　んぷぷっ！　んん♪　叔父ひゃま～♪　んぶぶ♪　んん♪　もぅイキそうなんれしゅね？　おちんぽぉ♪　んぷっ！　じゅるる♪　ぴゅっぴゅしそうなんれしゅね？」

小春

「ぅぷっ！　じゅぶっ！　じゅぶぶぶぅ～！　じゅぶ！　じゅるる……！　ふふ♪　ほら叔父さん♪　イっひゃえ！　おちんぽぉ……！　ん～！　じゅる♪　じゅるるるぅ～♪」

小春

「2周りも年下の女の子にいいようにされながら～……♪　じゅる♪　じゅるじゅるじゅるじゅる♪　ん、んん♪　雑魚ちんぽらしく無様におちんぽぴゅっぴゅしちゃえ～♪」

美冬

「はぷっ！　じゅりゅりゅりゅ～～～♪　んちゅ♪　れ～ろれろれろ～♪　あぁ～♪　叔父様ぁ♪　んちゅ♪　じゅるるるるぅ♪　イっへくらひゃいぃ♪　ん～ちゅ♪　ちゅ♪　ちゅ♪」

美冬

「私達が全部飲んであげましゅからぁ♪　ちゅぷ♪　れろれろ♪　ん～ちゅ♪　一生女の子を孕ませるられない可哀そうな精液ぃ♪　んちゅ♪　れ～ろれろれろ～♪　私と小春ちゃんに飲ませてください♪」

小春「そら叔父さん♪　イっちゃえイっちゃえ～♪　雑魚ちんぽびゅびゅ～って吐き出しちゃえぇ♪」

美冬「叔父様ぁ♪　イってください♪　ほら♪　イって？　おちんぽイって？　可愛そうな包茎おちんぽぉ♪　んん♪　汚いチンカスおちんぽぉ～♪　可愛らしくイっちゃってください♪」

小春「ほらイケ♪　イケイケイケイケイケイケイケ～～～～～♪」

美冬「イっちゃえ♪　イっちゃえイっちゃえイっちゃえイっちゃえイっちゃえイっちゃえイっちゃえ～～～～♪」

小春「ん～♪　じゅる♪　じゅるるる♪　じゅるるるるるるるる♪　じゅりゅりゅりゅりゅりゅ～～～～～～～～～～～♪」

美冬「ん～♪　じゅる♪　じゅるるる♪　じゅるるるるるるるる♪　じゅりゅりゅりゅりゅりゅ～～～～～～～～～～～♪」

小春「ん、んむぅ！？　んぷぅっ！？　ぅ！　じゅる！　じゅるるる！　じゅりゅりゅりゅりゅ～～……ん、んむぅ……！」

美冬「ん、んむぅ！？　んぷぅっ！？　ぅ！　じゅる！　じゅるるる！　じゅりゅりゅりゅ～～～……ん、んむぅ……！」

小春「えぅ……！　じゅる……じゅるるる……ん、んん～……んむっ！　ん、んん～……ぷはぁ！　はぁ、はぁ、はぁ、はぁぁ～……うぷっ！　うぇぇぇぇ……！　叔父さんの精液まっず～～～い！」

小春「えうぅぅ……！　気持ち悪ぅ～～～……あうぅ……美冬ぅ～……助けて～……」

美冬「んちゅ……じゅる♪　じゅりゅりゅりゅ～～～……ん～……ちゅ♪　ん、ぷはぁ♪　はぁ、はぁ♪　小春ちゃんは精液あまり得意じゃないもんね」

小春「今まで色んな精液飲んできたけど、流石にここまでマズイのは初めてだったから……」

小春「うぅぅ……！　まっずぅ～！　叔父さんの精液ゲロマスだよ～……！」

美冬「こ、小春ちゃん！　本当に大丈夫？　無理して飲まなくていいんだよ？　ね？　ほら、こっち。私が小春ちゃんのお口からザーメン取り出してあげるから」

小春　「美冬ぅ～……ありがとう～♪　はぁ、はぁ……」

美冬　「うん♪　ほら、チンカス舌に乗せてれ～ってして？」

小春　「ん……れ～～～～……はぷ♪」

小春　「ん、美冬……そんなにごっくんして大丈夫？」

美冬　「うん♪　大丈夫だよ♪　私、元々精液好きだし、チンカスも大丈夫だから♪」

美冬　「それにね？　小春ちゃんの甘い唾液と一緒にごっくんしてるから、もっとも～っと美味しく感じちゃうの♪」

美冬　「だからもっと頂戴？　小春ちゃんの唾液が混ざった叔父様のチンカスジュース♪　いっぱい飲ませて？」

小春　「んもぅ美冬ってば……♪　そんなこと言われたら断れないよ～♪　ん～……ちゅ♪」

美冬　「ん、んん～……んむぅ……くちゅ♪　くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ♪」

美冬　「ん……ごく♪　ごく♪　ぷはぁ～～♪　はぁ、はぁ、はぁぁ～～～……♪」

美冬　「えへへ～♪　小春ちゃん♪　ご馳走様～♪
いっぱい飲ませてくれてありがとうね♪」

小春　「いやいや！　結局叔父さんのチンカスもザーメンも全部飲んでもらっちゃったし、お礼を言うのはあたしの方だよ～……」

小春　「って、あれ？　叔父さんどうしたの～？　そんな寂しそうな目しちゃって～♪　ほったらかしにされて悲しくなっちゃったのかな～？」

美冬　「あ、すみません！　小春ちゃんとのキスで頭いっぱいになっちゃって叔父様の事完全に忘れちゃってました……！　あうぅ……ごめんなさいぃ……」

小春　「あは♪　今にも泣きそうな顔しちゃって～♪
大の大人が寂しくて泣きだすとか恥ずかしすぎでしょ～♪」

美冬　「あぅあぅぅ……叔父様ぁ……どうか泣かないでください……」

美冬　「ほ～ら♪　叔父様ぁ～～……♪　よいしょ……っと♪」

美冬　「私はちゃんと傍にいますから♪　はい♪　叔父様は一人じゃないですよ～♪　ん～ちゅ♪
ちゅ、ちゅ♪」

小春　「はぁ～……ほんっと世話のやける叔父さんだね～……」

小春　「ん……しょ……っと～……♪」

小春　「は～い♪　おじさ～ん♪　ん～、ちゅ♪　れろ……ちゅぷ♪　ちゅぅぅ～～……ちゅ♪」

美冬　「はぁ～……叔父様？　どうですか？　落ち着いてくれましたか？」

小春　「ほんと、ちょっと無視したからって泣いたりしないでよね～？」

美冬　「叔父様を泣かせるのも大好きですけど……それでおちんぽ萎えちゃったら困りますから……」

小春　「叔父さんには沢山射精してもらわないと……んちゅ♪　お金搾り取れないから……ほら♪　ふぅにお耳キスされてるんだから元気だして？　おちんぽ勃起させて？」

美冬　「おちんぽも元気だしてください♪　そ～れ♪　おちんぽ頑張れ～♪　おちんぽ頑張れ～♪」

小春　「最後の仕上げに～」

美冬　「私達の吐息で、おちんぽ勃起させてくださいね♪」

小春「叔父さ～ん♪」

美冬「叔父様～♪」

小春ɑ「すぅぅ～～……はぁぁぁぁ～～～～～～～～♪　はぁぁ～～～♪　はぁぁ～～～♪　はぁぁぁぁぁぁぁぁ～～～～～～～～～～～～♪♪」

美冬ɑ「すぅぅ～～……はぁぁぁぁ～～～～～～～～♪　はぁぁ～～～♪　はぁぁ～～～♪　はぁぁぁぁぁぁぁぁ～～～～～～～～～～～～♪♪」

小春「は～い♪　おちんぽ復活おめでと～♪」

美冬「これでまだ射精できそうですね♪　はぁ～……本当に良かったです～♪」

小春「まぁとりあえずフェラで射精したからには追加で4万円もらっていくね～♪」

美冬「えへへ♪　これでもう合計8万円ですね♪　叔父様♪　美味しいおちんぽミルクとお金、ご馳走様です♪」

小春「でもこんなハイペースで射精しちゃって大丈夫～？　あたし達とセックスできるかな～？」

美冬　「父様のくっさ～い中年フェロモンでおまんこ濡れてきちゃってて……徐々に叔父様とセックスする準備整ってきてますから……」

美冬　「途中でリタイア……なんて事にはならないよう気を付けてくださいね？　お～じ～さ～ま♪」

トラック０４

小春　「ね～ね～♪　叔父さ～ん♪　見てみて～♪　こ～こ♪　あたしのおまんこ～♪」

美冬　「えへへ～♪　叔父様のおちんぽペロペロしてたら私達も興奮しちゃいまして♪」

小春　「あたしも美冬も～……ほ～ら♪　おまんこちょこっと開くだけで～♪」

美冬　「やん♪　エッチなお汁が子宮から漏れて……あうぅ♪　とってもスケベです～♪」

小春　「ね～ね～？　叔父さんって変態だし～……あたし達のおまんこ♪　当然興味あるよね～？」

美冬　「折角の機会ですし、どうですか？　私達のここ……おまんこ♪　もっと近くで見てみませんか？」

小春　「JKの生おまんこはレアだよ～？　普通なら追加料金を払わなきゃ間近で見せたりなんてしないんだから♪」

美冬　「叔父様ってば、あまりに射精が早すぎて可哀そうでしたし、今回はタダで見せてあげます♪」

小春　「おまんこ見ながら自分でシコってもいいよ～？　勿論射精したら十万貰うけどね～♪」

美冬　「でもおちんぽぴゅっぴゅ我慢出来たら無料ですから、頑張って我慢してくださいね♪」

小春　「んじゃ早速～♪　叔父さんの顔の上に～……」

美冬　「おまんこを近づけて～……」

小春　「あは♪　叔父さ～ん♪　どう？　あたしの勝負パンツ♪　愛液で濡れてエッチでしょ～♪」

美冬　「私のパンツはピンク色だから染みも目立っちゃって……あうぅ♪　とっても恥ずかしいです～♪」

小春　「って、あ！　叔父さん？　まだおまんこの匂い嗅いじゃダ～メ♪　その前に最後のひと手間をしなきゃだから♪」

美冬　「え～っと……確かここに……あ！　はい♪　ありました♪　えへへ～♪　叔父様～♪　これ、何だか分かりますか？」

小春　「これはね～？　あたしと美冬が愛用してる香水だよ～♪」

小春　「これをおまんこに吹きかけると～……は～い♪　プシュプシュ～♪　プシュプシュ～♪」

美冬　「私も～♪　おまんこに～……えい♪　プシュプシュ～♪　プシュプシュ～♪」

小春　「あは♪　叔父さ～ん♪　分かる～？　あたしが今吹きかけたのは爽やかなレモンシトラスの香りで～……」

美冬　「私はピーチブロッサムの香りです♪　どうですか？　おまんこから良い香りがしてきませんか？」

小春　「って、あは♪　叔父さんってばうっとりした顔でおまんこ嗅いでる～♪」

小春　「鼻の穴もガン開き～♪　ちょ♪　鼻毛まで丸見えだし♪　叔父さんきっも～♪　きんっっも～～～～♪」

美冬　「叔父様もおちんぽのケアはした方がいいですよ？　こうやって一工夫すればおまんこも良い匂いがするんですから♪」

小春　「あ～……でも叔父さんに香水をかけても臭さに負けちゃうんじゃない？　いくら何でもこんなに臭い人を想定して作られた商品じゃないだろうし♪」

美冬　「ふふ♪　確かに小春ちゃんの言う通りかも♪　叔父様の不潔さはギネス級ですもんね♪」

小春　「そんな変態な叔父さんには～♪　じゃ～ん♪　特別にJKのおまんこの中身♪　見せてあげるね～♪」

美冬　「さぁ叔父様～♪　どうぞ♪　綺麗な桃色おまんこ♪　楽しんでください♪」

小春「せ～の♪　おまんこぱ～～～～～♪」

美冬「せ～の♪　おまんこぱ～～～～～♪」

小春　「は～い♪　叔父さんおまたせ～♪　小春のメスガキおまんこだよ～？　どう？　いっぱいおちんぽ入れて来たけど綺麗な形してるでしょ～♪」

美冬　「叔父様ぁ♪　私のおまんこもよく見てください♪　毎日綺麗にお手入れしてるパイパンおまんこですよ～？」

小春　「叔父さん達って皆パイパン好きだよね～♪　ちょっと剃り残しがあるだけで萎える変態もいるし業が深いっていうか～♪　ほんっとキモイっていうか～♪」

美冬　「ふふ♪　叔父様はおまんこを見るのは初めてでしょうし、興奮しちゃうのも仕方ないです♪」

美冬　「はい♪　どれだけ気持ち悪くても気にしませんから存分におまんこ楽しんでください♪」

小春　「叔父さ～ん♪　おまんこ分かる？　ここが子宮に繋がるおまんこ穴だよ～？」

小春　「それでこっちがおしっこのあ～な♪　叔父さんみたいな童貞はよくおまんことおしっこの穴を間違えちゃうから覚えておいてね～♪」

美冬　「そしてここが女の子の敏感なお豆、クリトリスです♪　はい♪　クリちゃんですよ～♪　えへへ♪　叔父様に見られてちょこっと膨らんじゃってます♪」

美冬　「このお豆をクリって潰すと～……ん、あん♪　女の子はすぐ感じちゃうんです♪」

小春　「あたしも～♪　ん、あん♪　やぁ♪　クリ弄るの気持ちいい♪　ん、はぁ、はぁ……♪」

小春　「んぁ♪　やん♪　えへへ♪　叔父さ～ん♪　見てる～？　クリを弄るとね？　おまんこの穴からぴゅぴゅってお汁漏れちゃうの♪」

美冬　「ん、はぁ、はぁ……♪　ぁ♪　叔父様ぁ♪　ん、あん♪　私のおまんこも見てください♪　ほ～ら♪　エッチなお汁がマンカスと合わさってぐちゅぐちゅ泡立ってます～♪」

小春　「はぁ、はぁ……♪　ん、ぁん♪　あは♪　美冬ってば、今日に限ってマンカス掃除し忘れるなんて……ん、あん♪　ほんっとあざといんだから～♪」

美冬　「んん♪　だって～……綺麗なおまんこもいいけど～……一日パンツで蒸らしたマンカスおまんこも好きかなって思ってぇ……ん、あん♪」

美冬　「はぁ、はぁ……エッチなお汁がビラビラにくっついてちょっと気持ち悪かったけど……んん♪　でもそのおかげで叔父様が興奮してくれるなら良かったかな……なんて♪　えへへ～♪」

小春　「はぁ……んもぅ……美冬ってばエッチなんだから～♪　ん、って、あ、やん♪　ちょっと叔父さ～ん？　鼻息くすぐったいってば～♪　ん、ひゃん♪」

美冬　「やっ！　叔父様？　駄目ですよ？　お触りは厳禁です♪　はい♪　叔父様は香りを楽しむだけにしてください♪」

小春　「もしおまんこに吸い付いたりしたら速攻で蹴っ飛ばすから……ん、はぁ、はぁ……そ♪　今はおまんこ見るだけ♪」

小春　「どうしても性欲が抑えきれないなら自分でおちんぽシコシコしてよね？」

美冬　「はい♪　叔父様が一人で寂しくシコシコする分には問題ありませんので♪　ん、はぁ、はぁ♪　存分に♪　ん、あぁ♪　私達をオカズに気持ちいいオナニーしちゃってください♪」

小春　「まぁ～？　包茎ちんぽをいくらシコった所でおまんこの気持ちよさには勝てないだろうけど♪」

美冬　「そうですね～♪　もし叔父様がシコシコぴゅっぴゅしてまだ勃起していたら、次こそは本物のおまんこでおちんぽ気持ちよくしてあげます♪」

小春　「叔父さんのおちんぽ萎えてなかったらあたし達2人のメスガキおまんこハメ比べしていいよ～？」

小春　「今目の前にあるとろとろキツキツのおまんこ穴♪　この中に包茎ちんぽ入れて～♪　おまんこの壁にチンカス擦りつけながら気持ちよくなっていいんだよ～？」

美冬　「私も、お口でチンカスくちゅくちゅしましたけど、おまんこでも叔父様の臭いチンカスいっぱい食べたいです♪」

美冬　「だから叔父様ぁ♪　私とセックス出来るように～……ん♪　頑張っておちんぽ勃起させてくださいね♪」

小春　「んぁ♪　はぁ、はぁ♪　やぁ♪　叔父さんってばすっごい勢いでおちんぽシコシコしてる～♪　う～わ♪　くちゅくちゅって泡立って……ん、あぁ♪　叔父さんの感じてる顔気持ち悪ぅ～♪」

美冬　「はぁ、はぁ♪　いいですよ～？　叔父様も、ん、あん♪　私達と一緒にオナニー楽しんでください♪」

美冬　「若くて綺麗な生おまんこをオカズに……さぁ♪　おちんぽシコシコ♪　おちんぽシコシコ～♪」

小春　「叔父さ～ん♪　いっぱいぴゅっぴゅ出来るようにあたしがおまんこサービスしてあげる♪　ほ～ら♪　お口開けて～？」

小春　「うん♪　じゃあいっくよ～？　おまんこの穴から～……マン汁かきだして～……ん、ぁ♪　はは♪　そ～～れ♪　マン汁ジュース召し上がれ～♪」

小春　「あは♪　あはははは♪　や～ん♪　叔父さんってば喉鳴らしながら必死にあたしのおまんこ汁飲んでる～♪」

美冬　「やぁん♪　叔父様ってばエサを待つ雛鳥みたいで可愛いですぅ♪　ほら叔父様～♪　どうか私のおまんこジュースも飲んでください♪」

美冬　「ん、どうぞこちら……ん、小春ちゃんと違って、白いマンカス入りの美冬特製おまんこジュース♪　飲み比べてくださいね♪」

美冬　「ん、やん♪　あぁ～♪　叔父様ぁ～♪　ん、はいぃ♪　もっと出しますから……ん、んん♪　お腹いっぱいになるまでおまんこジュース飲んでいいですから♪」

美冬　「はぁ、はぁ……ん♪　あ♪　叔父様ぁ♪　ん、んん♪　ふふ♪　あぁ♪　可愛い～♪　ん、あぁ♪　とっても可愛いですぅ♪」

小春　「はぁ……ん♪　ね～美冬～？　美冬の可愛いおまんこ見てたらあたし、美冬のおまんこくちゅくちゅしたくなってきちゃって……」

美冬　「うん♪　私も……自分の指だけじゃ飽きてきた所だから……」

小春　「ならさ、あたしと美冬でおまんこの触りっこしよ？」

美冬　「えへへ♪　やった～♪　小春ちゃんのおまんこプニプニで気持ちいいから好きぃ～♪」

小春　「あたしだって美冬の綺麗で卵肌なおまんこ大好きだし♪」

美冬　「あうぅ……♪　小春ちゃ～ん♪　好きぃ♪　大好きぃ♪」

小春　「あはは♪　そんなの知ってるし～♪　じゃあ美冬のおまんこ、弄っちゃうね？」

美冬　「うん♪　小春ちゃん……来てぇ……♪」

小春s　「ん♪　やっ♪　あぁ～～ん♪」

美冬s　「ん♪　やっ♪　あぁ～～ん♪」

小春　「あっ♪　や♪　美冬ぅ……♪　んっ♪　そんな、いきなり指でクイクイしちゃ……♪　ぁ♪　やっ♪　ん、あ、あぁん♪　気持ちよすぎるよ～……♪」

美冬　「小春ちゃんだって……ん、やん♪　そこ♪　私の大切なクリちゃん……んん♪　押しつぶしちゃ……あぁん♪　気持ちよすぎて……ん♪　はぁ、はぁ♪　マン汁零れちゃうぅ……♪」

小春　「はぁ、はぁ♪　あはは♪　美冬のおまんこ、まるで蛇口みたいにお汁止まんないね～♪　ん、それ♪　もっと出しちゃえ♪　叔父さんにいっぱいおまんこ汁飲ませちゃえ♪」

美冬　「やっ♪　あうぅ……♪　叔父様ぁ♪　ふぅ♪　やぁ……そんな、んん♪　私だけじゃなくって……小春ちゃんのも……ん～……私がお漏らしさせますからいっぱい飲んでください♪」

小春　「ふぇ！？　やっ！　美冬……！？　ん！　あぁん！？　やっ♪　だ、ダメぇ……♪　ん、んん♪　そこ、弱いにょにぃ～……♪　あっ♪　やっ！　ん、っきゅうぅぅぅぅう！！」

小春　「はひゃああ！！　やっ！　あ、ん、んん！　美冬ダメ！　ん、やっ♪　おまんこ軽くイっちゃって……！　ぅ！　ん、きゅうぅぅ……！」

美冬　「えへへ～♪　小春ちゃんはおまんことおしっこの穴同時に責められるのが弱いんだもんね～♪　もっと弄ってお漏らしさせてあげる♪」

小春　「やっ！　んもぅ……！　ん、や♪　あぁん♪　はぁ、はぁ……ぅぅ……こうなったら美冬にも仕返ししてあげるから！」

美冬　「はぇ？　小春ちゃん？　って……はぷっ！？」

小春　「どう？　美冬～？　おまんこ弄りは美冬の方が上手いけどキスならあたしに分があるんだから♪」

美冬　「だからっていきなりエッチなキスなんてビックリしちゃうよぉ……うぅ……思わずプシュってお漏らししちゃった～……」

小春　「ならもっとお口を犯してあげる♪」

美冬　「小春ちゃ……んぷぅっ！」

小春　「はぁ、はぁ♪　やぁ♪　美冬におまんこ弄られながらキスしてると……ん、あぁ♪　お腹の奥ムズムズしちゃって……うぅぅ……♪　んぁ♪　や♪　おしっこ漏れちゃう……♪」

美冬　「んん♪　私もぉ……やっ、あん♪　だ、ダメだよぉ……おしっこの穴ほじほじされちゃ……あん♪　やぁ……漏れちゃうぅ……んうぅ……♪　おしっこ漏れちゃうよ～……」

小春　「はぁ、はぁ……それならさ……ん♪　もういっその事このまま叔父さんにあたし達のおしっこ飲んでもらっちゃおっか♪」

美冬　「ふぇぇ！？　小春ちゃん、それ本気なの～？」

小春　「勿論本気も本気♪　叔父さんだって……ほら♪　今も待ち遠しそうにお口開けて待ってるし♪」

美冬　「やぁ……流石におしっこは恥ずかしいです……けど……えへ♪　えへへへ～～♪　叔父様に私の臭いおしっこ飲んでもらえるなんて……あぁん♪　エッチすぎておしっこの穴ひくひくしちゃいます～♪」

小春　「そうと決まれば、沢山おしっこ出るようにも～っとキスしておまんこ弄っておしっこの穴広げ合おう？」

美冬　「うん♪　小春ちゃんと一緒にいっぱいおしっこ出して叔父様に飲ませてあげます♪」

小春　「んちゅ♪　じゅる♪　じゅるる♪　ん～♪　美冬ぅ～♪　ん～ちゅぷ♪　れろれろ♪　ちゅ♪　一緒にぃ～♪　ん～……」

美冬　「れろ♪　れろれろ……ん～ちゅ♪　うん♪　一緒におしっこ出そう？　ん、ちゅ♪　じゅる♪　じゅるるるぅ～♪」

小春　「あ♪　ん、ちゅ♪　お、おしっこ～……♪　れろ♪　れろれろ……んちゅ♪　じゅるる♪　んん♪　出る♪　おしっこ出る♪　美冬と一緒におしっこぉ♪　おしっこおしっこ～♪」

美冬　「ぁ♪　や♪　ん、ちゅぷ♪　ん、んん♪　小春ちゃん……♪　や♪　あ、あ、あ、あぁぁ……♪　ん、ちゅ♪　じゅるる♪　じゅるる♪　じゅるるるぅぅ～～♪」

小春t

「おしっこ出る♪　おしっこ～♪　おしっこお
しっこおしっこおしっこ～～～♪　ん、んん♪
　やぁ♪　出る♪　でるでるでるでるでるでる
でるでるぅぅ～～♪　んん♪　おしっこイっ
きゅうぅぅぅぅぅぅぅぅ♪♪」

美冬t

「おしっこ出る♪　おしっこ～♪　おしっこお
しっこおしっこおしっこ～～～♪　ん、んん♪
　やぁ♪　出る♪　でるでるでるでるでるでる
でるでるぅぅ～～♪　んん♪　おしっこイっ
きゅうぅぅぅぅぅぅぅ♪♪」

小春u

「ひゃあぁぁぁぁぁん♪♪」

美冬u

「ひゃあぁぁぁぁぁん♪♪」

小春

「あぁぁ♪　うそうそうそうそ～♪　叔父さんに
本当におしっこかけちゃってる♪　ん♪　あ、
やぁ♪　叔父さんのお口におしっこジョロジョ
ロ注いじゃってるぅ～♪」

美冬

「あぁ♪　叔父様ぁ♪　飲んでください♪　私と
小春ちゃんのおしっこ～♪　はい♪　お口に
いっぱい注いであげますからぁ♪　黄色くて
しょっぱいおしっこ飲んでください～～♪」

小春

「はぁ、はぁ♪　叔父さ～ん♪　ほ～ら♪　〜〜の
新鮮なおしっこだよ～♪　それそれ～♪　じょ
ろじょろ～♪　じょろじょろ～♪」

美冬　「私も～♪　パイパンおまんこから出したてのおしっこ飲ませてあげます♪　えい♪　えいえ～い♪」

美冬　「叔父様もおしっこでうがいするみたいにガラガラ～ってしてくださ～い♪」

小春　「ん、はぁぁ～♪　あともう少し……んん♪　ほら叔父さ～ん？　もう少しでおしっこ終わっちゃうよ～？　今のうちによく味わって～？　ん、あぁ♪　ほらおしっこだよ～？　美味しいおしっこぉ♪　ん、ごくごく飲んで～？」

美冬　「はぁ、はぁ♪　あぁ……ん、最後にぃ……ん♪　はい♪　お～じ～さ～ま♪」

小春　「おしっこじょろじょろ～～～♪　おしっこごくごく～♪」

美冬　「おしっこじょろじょろ～～～♪　おしっこごくごく～♪」

小春　「ん、ん～～～～♪　はぁぁぁ～～～～～～～♪　あぁ♪　トイレ以外でおしっこなんてほんっと久しぶり～♪　はぁ～♪　すんっごい気持ちよかった～♪」

美冬　「えへへ～♪　私も小春ちゃんと一緒におしっこ出来て気持ちよかったよ～♪　ん～♪　はふぅ～♪　あぁ♪　すっごく気持ちよかった～♪」

小春　「叔父さんも現役JKのおしっこ、それも2人分飲めて幸せだったでしょ～？」

美冬　「私と小春ちゃんのおしっこ、どっちが美味しかった……って聞いても分からないですよね♪　2人同時に叔父様のお口に放尿しちゃったわけですし……」

小春　「って、あは♪　叔父さんってばまだお口開けっぱなしだし♪　な～に～？　おしっこのお替り欲しいの？」

小春　「でもごめんね～♪　おしっこってそんな簡単に出ないからさっきので打ち止め♪」

美冬　「そのかわり、レズキスして溜めたエッチな唾液を飲ませてあげますから、これで我慢してください♪」

小春　「あ、でも口移しじゃなくて上からたら～って垂らす感じでね？　今の叔父さん、おしっことマン汁臭くてキスなんかしたくないもん♪」

美冬　「ふふ♪　叔父様～？　準備はいいですか～？」

小春　「それ♪　いっくよ～？」

小春<「ん～……くちゅくちゅくちゅくちゅ♪　じゅるる……ん、れろ～～～～～～～～～～……♪　ん、れ～～～～～♪　じゅるる♪　ん、れ～～～ろれ～～～～～～～～～♪」

美冬<「ん～……くちゅくちゅくちゅくちゅ♪　じゅるる……ん、れろ～～～～～～～～～～……♪　ん、れ～～～～～♪　じゅるる♪　ん、れ～～～ろれ～～～～～～～～～♪」

小春「あは♪　うっわ～♪　一心不乱に唾液追いかけてる叔父さん気持ち悪ぅ～～♪」

小春「そんなに欲しいなら直接唾吐きつけてあげるね～♪　ん～……ぺっ♪　ぺっ♪　ぺっ♪　くちゅくちゅくちゅくちゅ……ん～……ぺっ♪」

美冬「あうぅ……小春ちゃんはしたなすぎるよ～……ん……でも……少しくらいなら私も……ん～……えい！　ぺっ♪　ぺっ、ぺっ♪」

小春「はふぅ～♪　ん～～～～♪　すっきりした～♪　出すもの出した後はほんっと気持ちいいね～♪」

美冬「ふふ♪　では3人共大分あったまってきましたし……」

小春「叔父さんの待ち望んでたHとの本番生セックス♪」

美冬γ

「してあげますね♪」

小春γ

「してあげる♪」

トラック０５

美冬　「叔父様？　おちんぽ、まだ勃起できそうですか？」

小春　「あは♪　さすがの叔父さんもこんな連続で射精しちゃおちんぽ萎えちゃうか～♪」

小春　「ん～、でもいいの～？　このままだと叔父さん、本番エッチ無しで終わっちゃうよ～？　童貞卒業できないよ～？」

美冬　「私、叔父様の童貞おちんぽといっぱいエッチできるってちょっと期待してたのに……あうぅ……残念ですぅ……」

小春　「あ～あ～　美冬もこんなに楽しみにしてたのに～　全く、仕方ないな～」

小春　「女の子が期待してるのに勃起できない情けな～い叔父さんには～……涎たっぷりのえっろ～いベロキスで～、おちんぽ♪　無理やりたたせてあ～げ～る♪」

美冬　「ん……私も……」

美冬　「叔父様といっぱいエッチしたいですし、お金もいただきたいですから♪　またここ♪　包茎おちんぽ♪　お口で勃起させてあげますね♪」

美冬　「ん……は～～……む♪」

美冬　「あ♪　おちんぽまた元気になってきて……ふふ♪　包茎の中にベロ入れられるのがいいんですね？」

美冬　「こうやって～……チンカスを皮の中から掬い取るように～……ん、れ～～……♪　れろれろれろれろ～～♪」

小春　「ふふ♪　叔父さ～ん♪　ん～ちゅ♪　ちゅ、ちゅ♪　あたしも叔父さんとエッチしてい～っぱいぴゅっぴゅして欲しいから～」

小春　「特別に～……ん～、くちゅくちゅくちゅくちゅ♪　ふふ♪　ﾚｽのおいしい唾液♪　飲ませてあげる♪」

小春　「ん～……くちゅくちゅくちゅくちゅ♪　ん、れ～……ちゅぷ♪　じゅる♪　じゅるる♪　じゅぷぷっ♪　ん、じゅる♪　じゅるる♪　じゅりゅりゅりゅ～～～～～♪」

小春　「んふ♪　じゅるる♪　ちゅぷ♪　ん～ちゅ♪　ちゅ、ちゅ♪」

美冬　「ん、じゅる♪　じゅるるる～～～……じゅる♪　じゅぷぷっ♪　ん、ん～～……ぷはぁ♪　はぁ、はぁ～♪」

美冬　「あぁ♪　叔父様ぁ♪　ふふ♪　すっかりおちんぽおっきくなりましたね～♪　これならきちんとセックス出来そうです♪」

小春　「ん、ちゅぱぁ♪　はぁ、はぁ♪　あは♪　でもさ～♪　どれだけおっきくなっても包茎には変わりないんだね～♪」

小春　「カリもチン皮に隠れちゃってさ～♪　こんな雑魚ちんぽであたし達の事満足させられるのかな～？」

美冬　「叔父様～♪　安心してください♪　最初から叔父様のおちんぽで気持ちよくなれるなんてこれっぽっちも期待してませんから♪」

美冬　「私はただ、包茎で童貞の叔父様がおまんこで可愛らしく喘いで無様におちんぽぴゅっぴゅしてくれればそれで満足なんです♪」

美冬　「ですので～……え～い♪」

美冬　「ふふ♪　叔父様はベッドで横になって楽にしてください♪」

美冬　「今日は叔父様の童貞おちんぽ、私が騎乗位エッチで搾り取ってあげますので♪」

小春　「わ～♪　美冬ってば大た～ん♪　叔父さんも美冬に童貞奪われるとかラッキーだね～♪」

美冬　「あぁ♪　叔父様のおちんぽ……んん♪　また大きくなって……えへへ♪　私のおまんこにちゅっちゅしてきます♪」

美冬　「はぁ、はぁ♪　んん♪　叔父様～？　いきますね～？　初めてのおまんこ♪　生で楽しんでください♪」

美冬　「ん、ん～……えへへ～♪　叔父様～♪　おちんぽ入っていきますよ～？　ほ～ら♪　もう先っぽ入っちゃいました～♪」

美冬　「このまま根元まで～……♪　んん♪　は～い♪　叔父様～♪　あと一歩ですよ～？　童貞卒業まで～……」

美冬　「3……2……1……えぇ～～い♪」

美冬　「は～い♪　叔父様～？　お疲れさまでした～♪　どうですか？　初めて味わうおまんこの感想は？」

美冬　「って、ふふ♪　叔父様ってば歯を食いしばっちゃって♪」

美冬　「そうやって我慢してないとすぐぴゅっぴゅしちゃうくらい気持ちいいってことですよね？」

美冬　「えへへ～♪　とっても嬉しいです～♪」

小春　「ねぇ美冬？　美冬はどうなの？　叔父さんの包茎ちんぽ気持ちいいの？」

美冬　「う～ん、こう言っちゃうと叔父様に失礼になっちゃうけど、あんまりおちんぽが入ってる感じがしないかも？」

美冬　「包茎だからカリの段差も感じられなくて……正直中学生のおちんぽ入れてるみたいで可愛い感じかな？」

小春　「ぷっ♪　あはははは♪　はえぇ～～♪　中学生並みのちんぽって……♪」

小春　「あ～♪　そっか～♪　そっかそっか～♪　この歳でやっと童貞を捨てられたのに中学生並みのちんぽだなんて……ぷぷ♪　叔父さんってばほんっと救いようのないダメダメちんぽだね～♪」

小春　「しかももうイキそうな顔してるし♪　包茎で童貞な癖に早漏だなんて♪　あ～あ～♪　どうすればそこまでクソ雑魚ちんぽが生まれるのか教えてほしいよ～♪」

美冬　「えへへ～♪　叔父様～……ん～……えい♪」

美冬　「あん♪　一回パンって腰を打ち付けただけで喘いじゃって♪　はぁ、はぁ……♪　あぁ♪　叔父様ぁ♪　もっと～♪　もっとその可愛らしい声を聞かせてください♪」

美冬　「私が一生懸命おまんこパンパンしてあげますから♪　包茎の先っぽ♪　恥ずかしがってる亀頭にいっぱいおまんこちゅっちゅしてあげますから♪」

美冬　「叔父様の情けない喘ぎ声♪　無様なお顔♪　隠したりせず全部見せてくださいね♪」

美冬　「ん～♪　えい♪　えい♪　えい♪　えい♪」

美冬　「おまんこパンパン♪　おまんこパンパン～♪」

小春　「あは♪　美冬ってば相変わらず可愛い声でエッチしちゃって～♪　ほんと可愛すぎるよ～♪　はぁ～叔父さんってば羨ましいな～♪」

小春　「そんな幸せ者な叔父さんには～……」

小春　「もっと幸せなハーレムエッチで♪　おちんぽ絞りとってあげる♪　ん～ちゅ♪」

小春　「あは♪　叔父さ～ん♪　どう？　ちゅとキスしながらのおまんこセックス♪　めっちゃ気持ちいいでしょ～♪」

美冬　「んもぅ♪　叔父様～？　小春ちゃんとキスしてからまたおちんぽ大きくなりましたよ～？」

美冬　「叔父様は今私とセックスしてるんですからぁ……ん、えい♪　えいえい♪　もっと私のおまんこで感じてください！　えいえい♪」

小春　「ふふ♪　そ～れ♪　叔父さ～ん♪　ん～……くちゅくちゅくちゅくちゅ♪　ふふ♪　口開けて～……ん、はぷっ♪」

小春　「ん～♪　じゅるる♪　じゅるるるる～～♪　じゅぷぷっ♪　ん～、ちゅ♪　じゅるる♪　じゅりゅりゅりゅ～～～～♪」

小春　「んぷっ♪　じゅるる♪　ん、ん～……ぷはぁ♪　はぁ、はぁ♪　ふふ♪　ん～ちゅ♪　ちゅぷ♪　じゅる……じゅるる♪　ん～ちゅ♪」

美冬　「ん、はぁ、はぁ♪　えへへ♪　叔父様ぁ♪　こんなのはどうですか～？　おまんこを目いっぱいおちんぽに押し付けて～……」

美冬　「ん♪　あぁん♪　あ♪　あ♪　あ♪　あぁ♪　ん、あん♪　やっ♪　叔父様ぁ♪　ん、んふぅ～♪　あ♪　あ♪　あ♪　あ♪　あ♪　あ♪　あぁん♪」

美冬　「ん、ふふ♪　叔父様～？　どうですか～？　私の感じてる声。興奮してくれますか？」

美冬　「あ、もちろん叔父様の包茎ちんぽは全然気持ちよくないんですけど、こうやって喘いでる演技をすれば叔父様も喜んでくれるかなって思いまして♪」

美冬　「例え演技だったとしても、ん、あぁ～ん♪　ふふ♪　こうやって喘いであげると他の叔父様も結構喜んでくれるんですよ？」

美冬　「ですから～……叔父様にもいっぱい私の喘ぎ声♪　まぁ演技なんですけど……♪　聞かせてあげますね♪」

小春　「んん♪　ちゅ♪　ふふ♪　ねぇ～叔父さ～ん♪　知ってる～？」

小春　「美冬って別に不感症って訳じゃないんだよ？　むしろぎゃ～く♪　エッチな事が大好きですぐ感じちゃう敏感な女の子なの♪」

小春　「そんな美冬が演技じゃないと喘げないだなんて滅多にないんだよ～？」

小春　「つまり何が言いたいかっていうと～……叔父さんの包茎ちんぽはそれだけ弱弱ってこ～と♪」

小春　「女の子一人喜ばせられない雑魚ちんぽなんて生きてる価値ないよね～♪」

小春　「ん～？　何泣きそうな顔してるの～？　もしかして自分の事可哀そうとか思っちゃってる？」

小春　「叔父さんってば生意気～♪　今この場で一番可哀そうなのは美冬なんだよ？　感じたくても感じさせてもらえない美冬のおまんこが一番可哀そうなんだから」

小春　「そ♪　ぜ～んぶ叔父さんが情けないのがイケナイの♪　だからせめて射精くらいは盛大にぴゅっぴゅしてあげてよね～？」

小春　「美冬の為ならあたしだって一肌脱いじゃうんだから♪　叔父さ～ん……ん～……ちゅ♪　れ～～……じゅるるるぅぅ～♪」

美冬　「ん、あ♪　叔父様♪　ふふ♪　もうイキそうなんですね？　えへへ♪　嬉しい♪　はぁ、はぁ♪」

美冬　「小春ちゃんもいっぱい頑張ってくれてるし……ん♪　私ももっとおまんこパンパン早くしてあげますから。叔父様もそろそろおちんぽぴゅっぴゅしちゃいましょうね～♪」

美冬　「はい♪　おまんこパンパン♪　おまんこパンパン♪　包茎の中に残ったチンカスも全部おまんこで綺麗にしてあげますぅ♪」

美冬　「はぁ、はぁ♪　んぁ♪　あ♪　あ♪　あ♪　あぁん♪　ふふ♪　最後は～♪　私の得意な高速おまんこピストンでイカせちゃいます～♪」

美冬　「えへへ♪　叔父様ぁ♪　いきますよ～？　え～い♪」

美冬　「んぁ♪　あ♪　あ♪　あ♪　あ♪　あ♪　あ♪　あ♪　あ♪　あ♪　あ♪　あ♪　あ♪　あ♪　あ♪　あ♪　あ♪　あ♪　あぁん♪」

小春　「ふふ♪　叔父さ～ん♪　んちゅ♪　れろ♪　れろれろ♪　じゅるる♪　じゅりゅりゅりゅ～～♪」

小春　「ぷはぁ♪　はぁ、はぁ♪　ふふ♪　美冬のピストンすごいね～♪　パンパンパンパンって♪　こんなおまんこされちゃもうおちんぽイっちゃうよね～♪」

小春　「でも勝手に射精するのはダ～メ♪　私がカウントしてあげるからそれに合わせて射精してね？　わかった？」

小春　「ん♪　じゃあいっくよ～？」

小春w　「10♪　9♪　8♪　7♪　6♪　5♪　4♪　3♪　2♪　1♪」

美冬w

「ん、あん♪　はぁ、はぁ♪　叔父様ぁ♪　ん、あぁん♪　叔父様ぁ♪　叔父様叔父様叔父様叔父様叔父様ぁ♪　あぁん♪　イってください♪　私の、JKの生おまんこでいっぱいイってください♪」

美冬w

「叔父様の初めての中出しを私にください♪　叔父様の情けないお射精♪　おちんぽぴゅっぴゅ♪　いっぱい私の中に注いでください♪」

美冬w

「はぁ、はぁ♪　あぁ♪　叔父様ぁ～♪　んん♪　叔父様叔父様叔父様叔父様叔父様ぁ～♪　せ～の～～♪」

小春x

「は～い♪　おちんぽぴゅっぴゅ～♪　おちんぽぴゅっぴゅぅぅ～～～～～♪」

美冬x

「は～い♪　おちんぽぴゅっぴゅ～♪　おちんぽぴゅっぴゅぅぅ～～～～～♪」

小春y

「ん、やぁ～～～～ん♪」

美冬y

「あ、きゃ～～～～～♪」

小春

「うわ♪　叔父さんってばすっごい体ビクビクしてる～♪　あは♪　叔父さんの初中出しだね～♪　おめでと～♪」

美冬　「ん、あぁん♪　叔父様の精子……ん、やぁ♪　ちろちろチン皮から漏れてるのがわかりますぅ♪」

美冬　「はぁ～♪　包茎の中で射精しちゃったせいか勢いは全くないですけど、でもじわじわおまんこがあったかくなってきて……あうぅ♪　とってもかわいいおちんぽぴゅっぴゅですぅ♪」

美冬　「はぁ、はぁ♪　はぁ、はぁ～～……♪」

美冬　「ん、えへへ♪　叔父様ぁ♪　ん～、ちゅ♪　ちゅ、ちゅ♪　んちゅ♪　じゅるる♪　じゅる♪　ん～……ちゅ♪　ちゅ、ちゅ♪」

美冬　「少しの間……ん、ちゅ♪　おちんぽぴゅっぴゅの余韻に浸りましょうね～♪　はぷっ♪　ちゅ、ん～……ちゅ♪」

小春　「あたしも～……叔父さ～ん♪　おちんぽ気持ちよかったね～♪　童貞卒業できて気持ちよかったね～♪　ん～ちゅ♪」

美冬　「はぁ～♪　ふふ♪　叔父様ぁ♪　初めてのセックスはどうでしたか？　私のおまんこ、楽しんでくれましたか？」

小春　「ぷっ♪　あはは♪　そうだよね～♪　美冬のおまんこが気持ちよくない訳ないよね～♪」

美冬　「あぅあうぅ♪　そう言っていただけるととっても嬉しいです～♪　はぁ、叔父様～♪　ん～ちゅ♪　ちゅ、ちゅ♪」

小春　「ちょっと叔父さ～ん？　美冬に童貞奪ってもらえて喜んでるとこ悪いんだけど、この後私とセックスするの忘れてない？」

小春　「美冬に中出しして終わりじゃないんだから。あたしにも～……ん～ちゅ♪　いっぱい射精してお金おいてってよね？」

美冬　「ふふ♪　小春ちゃんに怒られちゃいましたね♪」

美冬　「では叔父様？　この後は小春ちゃんとも本番セックスして包茎おちんぽ、気持ちよくなってくださいね♪　ん～ちゅ♪」

トラック０６

小春　「はぁ～♪　叔父さんのおちんぽ、美冬のマン汁でベトベト～♪」

美冬　「えへへ♪　セックスした後のおちんぽってどうしてもこうなっちゃうから……あうぅ……ちょっと恥ずかしいよ～……♪」

小春　「別に美冬のマン汁は美味しいから大歓迎なんだけど……これ、叔父さんのチン皮に精液がたまって……うわ……皮の中に白い液体たまって気持ち悪ぅ～♪」

小春　「すぅぅ～～～～……はぁぁぁ～～～～♪　あ～♪　叔父さんのおちんぽくっさ～♪」

小春　「なるほどね～♪　こうやってチン皮の中に残った精液が一晩たつとチンカスになるんだ～♪　ならあの臭さも納得かも」

美冬　「包茎の叔父様にはおちんぽ掃除は難しいでしょうし、このままだとまた確実にチンカスおちんぽの出来上がりですもんね」

小春　「仕方ないから……ん……れ～～……ちゅぷ♪　ん～ちゅ♪　ちゅ、れろ♪　れろれろれろれろ……ん～ちゅ♪　ちゅ、ちゅ♪」

小春　「チンカス掃除のできない叔父さんの代わりに～……ちゅ♪　あたしがお掃除フェラしてあげる♪」

小春　「ちゃんとおちんぽキレイにしてからセックスしてよね～♪　あ～む♪」

美冬　「小春ちゃんってば私の愛液も一緒に飲んじゃって……あうぅ……エッチだよぅ……」

小春　「んふふ♪　叔父さんのザーメンだけだったらマズくて吐いてただろうけど、美冬のマン汁も一緒なら全然大丈夫だから♪」

小春　「ん、ちゅ♪　ん～♪　くちゅ♪　くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ♪　んぷっ♪　ん……ごく♪　ごく♪　ごく♪　ぷはぁ♪　はぁ、はぁ～♪」

小春　「ん～♪　美冬のおまんこ汁すっごく美味しいよ～♪　ん～……あむ♪」

美冬　「あぅ～……あぅあぅ～……♪　小春ちゃんってば私を恥ずかしがらせる天才だよぅ……」

美冬　「むぅ～……このまま小春ちゃんのフェラを見てると恥ずかしくなっちゃうから……」

美冬　「えへ♪　叔父様ぁ～♪　セックスしてる時はキスできませんでしたので、いっぱいちゅっちゅしましょうね♪　ん～、ちゅ♪」

美冬　「ん～、おじひゃま～？　もっと深くまでキスしてあげますから～……お口あ～んしてくらひゃ～い♪」

美冬　「は～……んむぅ♪　じゅる♪　じゅるるる♪　じゅりゅりゅりゅりゅ～～～～～♪　じゅるる♪　じゅぷっ！　じゅぷぷぷ♪　ん、んん～♪」

美冬　「ん、えぷ♪　じゅぷぷ♪　じゅる♪　じゅる　じゅるじゅるじゅるぅ♪　じゅるる♪　ん、ん～……ちゅぱぁ♪　はぁ、はぁ♪」

美冬　「えへへ♪　もっとエッチなキスしましょうね～♪」

小春　「ん、んむぅ♪　じゅる♪　じゅるるるぅ～♪　ん、んぷっ♪　ぷはぁ♪　はぁ、はぁ♪　う～わ♪　叔父さんのおちんぽ急におっきくなってきて……」

小春　「あは♪　これだけおっきければ……ん～ちゅ♪　もう一回くらいセックスできるよね？　お～じ～さん♪」

小春　「どう？　わかる～？　今叔父さんのおちんぽに当たってるもの♪　そう♪　あたしのパイパンおまんこ♪」

小春　「美冬とキスしながらでいいから～、このままこれ♪　入れちゃうね～？」

小春　「はぁ、はぁ♪　あは♪　先っぽから少しずつぅ～……おまんこの中に入れて～……♪」

小春　「ん～……おちんぽの根元まで～……ん～……え～～～い！」

小春　「あは♪　叔父さ～ん♪　2回目の本番セックスおめでとう～♪」

美冬　「ん、ぷはぁ♪　はぁ、はぁ♪　えへへ♪　叔父様♪　おめでとうございます♪」

美冬　「これでめでたく叔父様は2人のJKと生セックスした男性になったんですよ？　はい♪　叔父様の弱弱おちんぽでもJKとエッチできたんです♪　本当におめでとうございます♪」

小春　「まぁこんな粗チンじゃ普通のラブラブ恋愛エッチなんて絶対できなかっただろうし？　あたし達に感謝しながら射精してよね～？」

小春　「ほ～ら♪　えい♪　えいえい♪　どう美冬のおまんこと比べてみた感想は？」

小春　「美冬は意外とガバマンだし、あたしの方がキツメで締め付けられてる感あるでしょ～♪」

美冬　「ふぇぇぇ！？　ちょ、ちょっと小春ちゃん！　そんな事言っちゃダメ～！」

美冬　「うぅぅ……叔父様ぁ？　そんな事ないですからね？　私がガバマンでゆるゆるなんじゃなくって小春ちゃんのおまんこがキツキツなだけですからね？」

小春　「まぁあたしはキツキツでもゆるゆるでもどっちでもいいけどね～♪　美冬のゆるくてガバガバなお漏らしおまんこ大好きだし♪」

美冬　「ひゃうぅ……うぅ……小春ちゃ～ん……それ以上虐めないで～……」

小春　「あはは♪　そうだね～♪　また叔父さんの事ほったらかしてもあれだし……」

小春　「ふふ♪　叔父さ～ん？　あんまり期待してないけど～♪　その雑魚雑魚包茎ちんぽであたしの事気持ちよくしてよね～？」

小春　「そ～れ♪　えい♪　えい♪　えい♪　え～い♪」

美冬　「叔父様ぁ♪　ん～ちゅ♪　どうか、小春ちゃんとセックスしてる間は私とキスしてください♪」

美冬　「はぁ、はぁ……♪　あぁ♪　叔父様～♪　ん～……ちゅ♪　ちゅ♪」

小春　「ふぅ、ふぅ～♪　ん、やっぱ美冬の言ってた通り叔父さんのおちんぽ全然気持ちよくな～い！」

小春　「包茎なせいでおちんぽつるつるだし、子宮の奥まで届かないし～……はぁ～～、予想してたとはいえショックだよ～」

小春　「ん～……ほら叔父さ～ん？　えい！　えいえい！　もっと頑張っておちんぽ大きくして～？」

小春　「じゃないと一生女の子に見下されながらセックスする事になっちゃうよ～？」

小春　「ほ～ら～♪　叔父さんにもしプライドって物があるなら頑張って意地を見せてよ～？　ほら～♪　ほらほらほら～♪」

美冬　「叔父様ぁ♪　んん♪　頑張ってもう少し小春ちゃんを満足させてあげてください。今のままじゃあまりにも小春ちゃんが可哀そうです～～」

美冬　「私も一生懸命キスでサポートしますから♪　はい♪　叔父様ぁ♪　おちんぽ頑張れおちんぽ頑張れ～♪　ん～ちゅ♪」

小春「お？　少しだけおちんぽおっきくなってきたね～♪　まぁそれでもまだこんなにちっちゃい訳だけど……ぷぷっ♪　あぁ♪　叔父さんの雑魚ちんぽほんっと雑魚すぎ～♪」

小春「あ～あ～♪　こんな雑魚ちんぽじゃ一生パンパンしても喘げなそうだし～♪　仕方ないからあたしも演技で気持ちよくなってるフリしてあげるね～♪」

小春「ほら♪　こんな風に～♪　あぁん♪　叔父さんのおちんぽ気持ちよすぎ～♪　ん、やぁ♪　ん、あ♪　あ♪　あ♪　あぁ～ん♪」

小春「お♪　お♪　お♪　おぉぉ♪　叔父さ～ん♪　もっと～♪　んん♪　もっとおちんぽ頂だ～い♪　もっとぉ♪　叔父さんの包茎ちんぽで～♪　小春のメスガキおまんこ気持ちよくして～♪　分からせて～♪」

小春「小春ぅ～♪　もう叔父さんのおちんぽじゃないとイケない専属おまんこになっちゃったの～♪」

小春「だからお願～い♪　もっとおちんぽぉ♪　おちんぽで子宮コンコンして～♪　小春は叔父さんの物なんだって分からせて～♪」

美冬　「ん、ぷはぁ♪　はぁ、はぁ♪　えへへ～♪　叔父様ぁ～♪　今度は唇だけじゃなくて～……こ～こ♪　叔父様のお耳にいっぱいキスしてあげますね♪」

美冬　「ん～ちゅ♪　ちゅ、ちゅ♪　はぷっ♪　ちゅぷ♪　れろ♪　れろれろれろれろ♪　ん～ちゅ♪　ちゅ、ちゅ♪」

小春　「あは♪　叔父さんってば必死に歯食いしばっちゃって～♪　まだ感じてる演技始めたばっかりなのにもうイキそうになってるの～？」

小春　「ん～？　へ～？　まだ我慢できそうなんだ～？　ふ～ん？　叔父さんにしては頑張るね～♪」

小春　「ならご褒美に～……そ～れ♪　おまんこきゅっきゅ♪　おまんこきゅっきゅ～～♪」

小春　「あはは♪　どう？　おまんこにきゅきゅ～って力を入れると～……ん♪　こうやっておちんぽ締め付けられるんだよ～？」

小春　「そ～れ♪　もう一度～♪　おまんこきゅっきゅ～♪　おまんこきゅっきゅぅぅ～～～♪」

小春　「あは♪　おまんこやめて～だなんて～♪　ご天に命乞いとか雑魚すぎ～♪　恥ずかしすぎ～♪　気持ち悪すぎ～♪」

小春　「ん～？　そんなにおまんこきゅっきゅやめてほしいの～？」

小春　「はぁ～～……んもぅ……しょうがないな～……なら一回おちんぽ抜いてあ～げ～……な～い！！」

小春　「あはははは♪　え～？　もしかして本当におまんこやめてもらえると思ってたの～？」

小春　「そんな訳ないじゃん♪　叔父さんの包茎ちんぽはあたし達のおもちゃなんだから♪」

小春　「おもちゃはおもちゃらしく情けなくイっちゃえばいいの♪　ほら♪　思いっきりパンパンしてあげるから無様におちんぽぴゅっぴゅしちゃってね～♪」

小春　「それそれ～♪　おまんこパンパン♪　おまんこパンパン～♪」

小春　「あ♪　ついでに喘ぎ声も出してあげるね～♪　ほ～ら♪　あぁん♪　ん♪　やぁ♪　あ♪　あ♪　あぁん♪」

美冬　「はふぅ♪　えへへ～♪　叔父様ぁ♪　ん～ちゅ♪　ちゅ、ちゅ♪　ふふ♪　そんなに我慢しなくていいんですよ？」

美冬　「快楽に任せておちんぽ気持ちよくなっていいんです♪　だって、今日は叔父様の童貞卒業記念日なんですから♪」

美冬　「一生に一度だけの記念日なんですよ？　お金の心配なんてせず、ただただ気持ちよくなっちゃってください♪」

美冬　「それに私……気持ちよく喘ぐ叔父様の事大好きですから♪　もっと叔父様の喘ぎ声聞かせてほしいです……叔父様～お願いしますぅ……」

美冬　「えへへ♪　はい♪　ありがとうございます♪　あぁ～……♪　やっぱり叔父様は可愛らしく喘いでる姿が一番です♪」

美冬　「無駄なプライドは捨てて、ただただ気持ちよくなりましょうね♪　はい♪　叔父様……大好きです♪　ん～ちゅ♪　ちゅ、ちゅ♪」

美冬　「私も～♪　ん～ちゅ♪　もっと激しく叔父様のお耳♪　ペロペロしてあげちゃいます～♪　ん、れ～……ちゅぷ♪」

小春　「はぁ、はぁ♪　ん、ふふ♪　叔父さん、もうイキそう？　イッちゃいそうなの？　あは♪　いいよ～？　美冬の言ってた通り、ん、我慢なんてしなくていいから♪」

小春「このまま……んん♪　おまんこきゅっきゅしてイかせてあげる♪」

小春「ん♪　はぁ、はぁ♪　叔父さんの包茎ちんぽじゃ子宮の奥……赤ちゃんのお部屋まで精液届かないだろうけど♪　まぁ頑張ってぴゅっぴゅしてよね～♪」

小春「んじゃ♪　ラストスパートいっくよ～？」

小春「そ～れ♪　パンパンパンパン♪　パンパンパンパン♪　おまんこパンパン♪　おまんこパンパン♪」

小春「ほら♪　ほらほらほらほらほらほらほら～♪　叔父さんイっちゃえ♪　無様におちんぽぴゅっぴゅしてイキ死んじゃえ♪」

小春♡「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ♪　それそれ♪　おちんぽイケ♪　おちんぽイっちゃえ♪　イケ♪　イケ♪　イケ♪　イケ♪　イケ♪　イケ♪　イっちゃえ♪　イっちゃえ♪　イっちゃえ♪　イっちゃえ～♪　そ～ら♪　おまんこパンパン♪　おまんこパンパン～♪」

美冬Y
「ん、ぷはぁ♪　はぁ、はぁ♪　あぁ♪　叔父様ぁ♪　イってください♪　小春ちゃんのキツキツおまんこにぴゅぴゅ～って♪　叔父様の劣等遺伝子が詰まったおちんぽミルクいっぱいぴゅぴゅぴゅ～～って出しちゃってください♪」

小春N
「ほらほら～♪　おちんぽイケイケイケイケイケイケイケイケイケイケイケイケ～♪　おちんぽイッちゃええええええぇぇ♪」

美冬N
「ほらほら～♪　おちんぽイケイケイケイケイケイケイケイケイケイケイケイケ～♪　おちんぽイッちゃええぇぇぇぇぇぇぇぇ♪」

小春A
「ん、きゃあ～～～ん♪」

美冬A
「ん、きゃあ～～～ん♪」

小春
「あははは♪　やぁ～♪　すっご～い♪　おちんぽ中でビクビク～って痙攣してるぅ♪」

小春
「でも精液全然奥まで届かなくって……ぷぷぷ～♪　あぁ～♪　ほんっと最後までだらしない包茎おちんぽ～♪」

小春
「チン皮を伝ってちろちろ漏れてるだけの雑魚雑魚精子～♪　こんな雑魚ちんぽじゃ一生女の子孕ませらんないね～♪　叔父さんの遺伝子はここで途絶えちゃうだよ～♪　ぷぷぷぷ～♪」

美冬　「あぁ♪　ゴム無しセックスでも女の子を一生孕ませられない可哀そうな叔父様ぁ♪　はぁ～♪　とっても情けなくて可愛らしいです～♪　ん～ちゅ♪　ちゅ、ちゅ♪」

美冬　「でもそんな可哀そうな叔父様が愛しくて～♪　ん～ちゅ♪　ちゅ、ちゅ♪　個人的には大好きですよ～？　ん～ちゅ♪」

小春　「はぁ～……ん、もうちょっと精液を絞り出して～……えい♪　おまんこきゅっきゅ♪　おまんこきゅっきゅ～～♪」

小春　「あは♪　やっぱりまだ残ってた♪　ん、せっかく射精してもらったんだし～少しはサービスしてあげないとだよね～♪」

小春　「ほ～ら♪　おまんこきゅっきゅ♪　おまんこきゅっきゅ♪　尿道に残った精液全部出しちゃえ～♪　えい♪　えいえい♪」

小春　「ん～？　流石にもう打ち止めかな？　は～い♪　叔父さ～ん♪　お疲れ様～♪」

小春　「ふふ♪　叔父さんってば蕩けた顔しちゃって～♪　ちょっと可愛いって思っちゃったじゃん♪　ん～ちゅ♪　ちゅ、ちゅ♪」

小春　「ほら♪　セックス後のラブラブキスだよ～？　ん～ちゅ♪　今だけは恋人みたいな優しくてあま～いキス♪　してあげる～♪」

小春　「ふふ♪　ん～？　な～に～？　美冬がしてるみたいにお耳にもキスしてほしいんだ～？　我儘だね～♪」

小春　「まぁいいよ～？　折角の童貞卒業記念だもん♪　叔父さんの我儘聞いてあげる♪」

小春　「ほ～ら♪　お～じ～さ～ん♪　ん～ちゅ♪」

美冬　「ん、はぁ～……♪　ふふ♪　叔父様～？　流石に続けての本番セックスは疲れちゃいましたか？」

小春　「なら少しだけ休んでからまたエッチしちゃおっか♪　お金、まだ持ってるんでしょ？」

美冬　「私たちはデリヘルの方みたいに時間制限はありませんので♪　お金のある限り、いつまでも叔父様のおちんぽのお世話をしてあげますよ？」

小春　「あ、もちろんホテルの延長料は叔父さん持ちだからそこだけ注意してよね？　お金をエッチで溶かしてホテルから出られないとかなってもあたし達は知らないから♪」

美冬　「ふふ♪　本気になった小春ちゃんに破産させられた叔父様はいっぱいいますからね♪　お叔父様も～……ん～ちゅ♪　ふふ♪　気を付けてくださいね♪」

小春　「あぁ～、美冬ってばいい子ぶっちゃって～♪　叔父さん？　騙されちゃダメだからね？　美冬に連続10回射精させられて病院送りにされた叔父さんもいるんだから。最悪殺されちゃうかもよ？」

美冬　「あうぅ……あの時はちょっとはしゃいじゃっただけで……叔父様？　安心してください。今日はそこまでするつもりはありませんので……うぅ……本当ですよ……？」

小春　「あは♪　まぁそん時はそん時で♪　最悪救急車くらいは読んどいてあげるからさ♪　今は難しいことなんて後回しにして、ただただ気持ちよくなろ？」

美冬　「はい♪　今日は叔父様の童貞卒業記念日ですもん♪　いっぱいい～っぱい私たちの<ruby>おまんこ<rt>・・・</rt></ruby>でお祝いしてあげますので♪」

小春Ｐ　「お～じ～さ～ん♪　いっぱいい～っぱい叔父さんの雑魚雑魚おちんぽ♪　気持ちよくしてあげるね♪」

美冬D

「お～じ～さ～ま♪　いっぱいい～っぱい叔父様の弱弱おちんぽ♪　気持ちよくしてさしあげますね♪」